



Title	認知・機能言語学研究 VII (冊子)
Author(s)	
Citation	言語文化共同研究プロジェクト. 2022, 2021
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/88335
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

言語文化共同研究プロジェクト 2021

認知・機能言語学研究 VII

小 葉 哲 哉

瀬 戸 義 隆

蘇 暁 笛

田 尾 俊 輔

Hiromasa ITAGAKI

Takashi MINO

Naomichi SAKABA

大阪大学大学院言語文化研究科

2022

言語文化共同研究プロジェクト2021

認知・機能言語学研究 VII

目 次

小 葉 哲 哉	： V 方ヲスル構文における受身ラレの二重標示について	1
瀬 戸 義 隆	： 現代日本語条件文の条件節の分布にもとづく分類	11
蘇 暁 笛	： 「V1+込む」の多義分析における多使用論的アプローチの有効性についての検討	21
田 尾 俊 輔	： 英語前置詞atの〈場所〉義と〈時間〉義の意味的關係に関する考察	31
Hiromasa ITAGAKI	： Language Creativity of Novel Instances: The Case of Perceptual Expressions for Tactile Sense	41
Takashi MINO	： A Brief Note on <i>There</i> Contact Clauses: With Special Focus on <i>There</i> Contact Clauses Selecting <i>Come</i> as the Second Verb	51
Hiromichi SAKABA	： <i>Mottainai</i> as a Japanese Cultural Keyword—A Key Semantic Difference to the English Word <i>Waste</i> —	61

V 方ヲスル構文における受身ラレの二重標示について

小薬 哲哉

1. はじめに

本稿では、(1) のように受身を表すラレが複数生起する V 方ヲスル構文を考察し、その文法的特徴を明らかにすることを目的とする。

- (1) a. わが国経済の発展は、企業家 (entrepreneur) 精神と技術革新 (innovation) により支えられていたといっても過言ではあるまい。技術革新については色々な用いられ方がされているが… (BCCWJ, 経済企画庁『経済白書 昭和 63 年版』)
- b. 病院嫌いの私の父が、はじめて入院したときです。(中略) 要するに、人格を持った立派な大人が、子ども同然の「おじいちゃん」などという一般的な呼ばれ方をされたために、自尊心がぶっ飛んでしまったのです。
(BCCWJ, 鷲田小彌太『時間をぜいたくに使う技術—知的浪費生活のすすめ』)

(1a) では、「用いる」の連用形に受身ラレが接続した「用いられ方」があり、さらにそれが受動動詞サレルの主語となっている。つまり、「V 方」(以下、「方名詞」と呼ぶ) という名詞句内とそれを項としてとる軽動詞スルの両方に、受身の標識が生じた直接受身文である。同様に、(1b) でも方名詞句内とスルの両方にラレが生起しているが、こちらは方名詞が対格で標示された間接受身文となっている。

興味深いのは、(1) において、方名詞がガ格で表されるかヲ格で表されるかの違いはあれど、どちらも一つの受動の意味を表していることである。つまり、(1) の解釈は、おおよそ(2) のような「方名詞の基体動詞+ラレ」を述語とする文で言い表すことができる。¹

- (2) a. 技術革新については、色々な用い方で用いられているが…
b. 「おじいちゃん」などという一般的な呼び方で呼ばれたために…

つまり、(1) は受身の意味を二つのラレによって二重に標示しているのである。本稿では便宜上、このような現象を受身ラレの「二重標示 (double marking)」と呼ぶことにする。²

以下では、2 節で先行研究における日本語受身文の分類を整理し、3 節でラレの二重標示が生じる V 方ヲスル構文にどのような言語的特徴があるのか、コーパスデータの観察に基づいて考察する。そして、4 節でラレの二重標示が V 方ヲスル構文においてなぜ可能なの

¹ 藤巻 (2020: 35, 脚注 19) でも作例を挙げて、同じ点が指摘されている。

² 単一の意味要素が複数の形式に具現するこのような現象は、研究者や分析のアプローチによって様々な用語が用いられ、またその定義や対象となる現象の範囲も一貫しない傾向が見られる (Lehmann 2005, Szymanek 2015)。本稿では「二重標示 (double marking)」という用語を用いるが、同一形式の形態素が複数生じるという意味では「反復 (repetition)」の方がよりふさわしいかもしれない (Lehmann 2005: 14 を参照)。

か、およびどのような理由で二重標示のパターンが選択されるのか、その動機づけについて検討する。5節で結論を述べる。

2. 日本語受身文の分類

まず、日本語受身文の分類について、先行研究の知見に基づき整理しておく。日本語の受身文は、対応する他動詞文が想定できるかによって、直接受身と間接受身に分かれることが知られる(寺村 1982)。直接受身は、述語動詞にラレが付加することで、基本となる文の非主語が主語へと昇格し、同時に主語が非主語へと降格する。また、直接受身は、主語への昇格と主語からの降格のどちらが一次的な機能となるかによって、「昇格型」と「降格型」の2つのタイプに機能的に分化する(例えば、益岡 1987; 志波 2015 も参照)。昇格型の直接受身では、主体(受身主語)が何らかの影響を受けたことを構造的に言語化する役目を持つものに対し、降格型の受身では、事態を引き起こした主体(動作主項)を背景化し、事態の存在・発生の側面を前景化する機能が主眼となる。前者は典型的には有情主語、後者は無情主語が関与するとされる。以下に、昇格型と降格型の典型的な例を提示する。

- (3) a. 佐藤は山田に殺された。 / 山田は佐藤に遅くまで働かされた。 [昇格型]
b. 花瓶に花が活けられている。 / 展覧会が開催された。 [降格型]

間接受身は、対応する他動詞能動文が想定できないタイプの受身文である。特に、主語には、述語動詞の項とは異なる名詞句が生起する。例えば、以下のような例が挙げられる。

- (4) 顔を殴られる(身体部位)、名前を呼ばれる(属性)、服を破かれる(衣服)、子供を褒められる(親族)、絵を褒められる(作品) (宮腰 2020: 121, 一部変更)
(5) 赤ん坊に泣かれる、雨に降られる、子供を自慢される、本を誰かに借りられる

(4) は、主体が「被害」あるいは「(はた) 迷惑」を被ることを必ずしも含意しないが、(5) はその含意が必ず生じる。このため、前者は「所有(者) 受身」や「持ち主の受身」、後者は「(はた) 迷惑(の) 受身」や「第三者の受身」と呼ばれる。

(4) の所有受身に生起する述語は、ヲ格名詞として主体に帰属する対象を選択する他動詞である。具体的には、ヲ格名詞が身体部位、属性、衣服、親族、作品など、主体に帰属する所有物や対象、属性などを表し、その主体と物理的・概念的に単一・同一のものとみなされる(宮腰 2020: 120)。一方、(5) の迷惑受身は、述語が自動詞の場合もあれば他動詞の場合もある。他動詞の場合、所有受身とは異なり、ヲ格名詞が主体に帰属する対象を表さない。

所有受身と迷惑受身の違いに関して、主体と帰属物の単一性・同一性の有無、つまり間接受身のヲ格名詞が受身主語に帰属するかどうかは、迷惑や被害性の含意の有無と互いに相関している。後の V 方ヲスル構文の考察にも一部関与するので、このことをもう少し確認

する。(4) と (5) のタイプにおける迷惑の含意の有無を説明する基準として指摘されてきたのが、述語動詞が表す事態に主体とその一部が関与すると捉えられるかどうかという点である(例えば、久野 1983, Washio 1993, 宮腰 2014, 2020)。つまり、所有受身は、ヲ格名詞が主体のいわば「代わり」として事態に関与し、身体部位などの帰属物を通して行為の影響を受ける。この「代わり」とみなせること、すなわち、受身主語が述語の表す事態に関与するのか、それともそこから排除されるのかによって、迷惑の含意の有無が異なるのである。

「関与」か「排除」かは、主語名詞と目的語名詞の物理的・概念的単一性や指示的同一性が問題となるが、日本語においてはかなり広い範囲の概念が主語の帰属物として理解されるようである。例えば、(4) 所有受身のヲ格名詞は、身体部位や属性だけでなく、作品といった物理的には主体と全く別の要素までをその一部とみなすことができる。他方、(5) の迷惑受身はそうした単一性や同一性が関与せず、主体が述語の表す事態の外側におり、当該事態全体から何らかの(悪)影響を受けることが語用論的に含意される。

以上、日本語受身文の分類として、(A) 直接受身に昇格型と降格型があること、および (B) 間接受身に所有受身と迷惑受身があることを見た。

3. V 方ヲスル構文におけるラレの二重標示

3.1. 調査方法とデータ収集

次に、V 方ヲスル構文における受身ラレの二重標示について考察する。

まず、収集した V 方ヲスル構文の受身文としての用法の分布を確認する。記述のための言語資料には、『現代日本語書き言葉均衡コーパス (Balanced Corpus of Contemporary Written Japanese)』(以下 BCCWJ) および検索用アプリケーション「中納言」を用いて用例を採集した。なお、このコーパス調査では (1) のようなラレの二重標示の例の他、次の一重標示の例、つまり軽動詞スルのみにはラレが付加したもの(述語標示) (6)(7) や、方名詞内にはのみラレが生じた例(名詞標示) (8) も比較のために収集している。

各パターンの用例数と用例全体に占める割合をまとめたものが、次頁の表 1 である。

(6) 日本の会社では、事業部間での交流が驚くほど少ない。同じ事業部内では意思の疎通を図っても、事業部間同士は「とくに必要ない」といった受け止め方がされている。
(BCCWJ, 本荘修二『日本的経営を忘れた日本企業』)

(7) だから、本来、[自衛隊法] 百二十条というのは、統計とか全体の計画とかをつくるための規定なんです。そうじゃないと、住民基本台帳法三十七条で情報は提供できないこととの整合性はとれないわけです。法形式では同じ規定のし方をされているんですよ。
(BCCWJ, 衆議院『国会会議録第 156 回国会』)

(8) あらすじを人に上手く語れない映画というのは、観る人によってストーリーが違う受け取られ方をしたり、観る環境や時期によって自分自身の印象も変わる作品ということなんですよ。(BCCWJ, 松岡充『文化夜總會』)

		N = 2798	
標示タイプ	表現	割合 (用例数)	
一重標示	述語標示	V 方 <u>ガ</u> サレル	0.85% (24)
		V 方 <u>ヲ</u> サレル	3.75% (105)
	名詞標示	<u>V</u> ラレ方ヲスル	2.96% (83)
二重標示		<u>V</u> ラレ方 <u>ガ</u> サレル	0.25% (7)
		<u>V</u> ラレ方 <u>ヲ</u> サレル	0.5% (15)
		合計	8.36% (234)

表1 受身ラレを含むV方ヲスル構文の用例数

表が示すとおり、そもそも受身ラレを含む用例は全体の8% (234例) ほどで、二重標示の例に至っては全体の0.75% (22例) と極めて少数しか見つからない。しかし、他のラレの用法を見ると、尊敬用法は述語にラレのついた一重標示のみで、用例数も1% (29例) に過ぎず、自発用法は全く見つからなかった。また、別のヴォイスカテゴリーである使役サセを見てみても一重標示のみが見つかり、そのうち述語標示が0.6% (17例)、名詞標示が0.17% (5例) である。受身の用法と比べても、さらに少ない結果となった。このように見てみると、V方ヲスル構文に見られるヴォイス標識としては、特に受身だけが数多く観察され、だからこそ二重標示も受身に偏って生じると推察される。

3.2. 観察

次に、ラレが二重標示されたV方ヲスル構文の特徴を受身文のタイプごとに観察する。なお3.1節で述べたように、そもそも用例の絶対数が少ないため、数的な根拠だけで当該現象に関する有意義な一般化を行うことは不可能である。むしろここでは、得られた用例をつぶさに観察し、そこから抽出される文法的特徴をWeb検索で得られたデータなどで補完しながら、詳細に記述することに重きを置く。

3.2.1. Vラレ方ガサレル

まず、Vラレ方がガ格でマークされた直接受身文「Vラレ方ガサレル」の事例について考察する。BCCWJで見つかったのは7例のみであるが、そのうち3例を以下に挙げる。

- (9) わが国経済の発展は、企業家 (entrepreneur) 精神と技術革新 (innovation) により支えられていたといっても過言ではあるまい。技術革新については色々な用いられ方がされているが… (= (1a))
- (10) EUの各国はほとんど麻薬の常用を健康にかかわる問題であるとみている。それなら、なぜそのようにまともな扱われ方がされないのであろうか。

(BCCWJ, ブライアン・フリーマントル[新庄哲夫(訳)]『ユーロマフィア』)

- (11) 「歴史は夜つくられる」という名言をもじって、「結石は夜つくられる」といういわれ方がされますが、まさにそのとおり、食事と就寝との間隔は、想像以上に大事なことなのです。 (BCCWJ, 大栄出版『結石—再発防止・予防 自己診断カルテ』)

方名詞の基体動詞には、「用いる」「扱う」といった対象の使用・活用を表す動詞が用いられている。用例における具体的な内訳を示すと、「使う」(3例)、「扱う」(3例)、「用いる」(1例)、「言う」(1例)であった。いずれの行為も、対象が何らかの(物理的・心理的)変化を被ることがないという意味で、対象への影響性は然程大きくないのが特徴的である。³

次に、基体動詞が表す行為の対象、つまり「Vラレ方」の主語に当たる項が、どのような表現として現れるかを検討する。各行為の対象は、例文中に太字で示している。(9)の「用いる」対象は「技術革新(という言葉)」だが、これは文の主題として文頭に独立して生起している。(10)では行為の対象となる項が先行文脈にのみ現れ、当該の受身文では省略されている。(11)では、方名詞を修飾する引用表現となっている。7例いずれも、基体動詞の対象項は、事態の中核的要素としては現れていない。このようなVラレ方ガサレル構文の形式と意味は、次のようなパターンとして捉えられる。

- (12) (NP-{ノ/ノ}TOP/MOD) Vラレ方-ガ SUBJ サレル
 <対象> <事態>

また、述語のテンス・アスペクトを見ると、7例いずれもル形で習慣的現在を表している。加えて、いずれも動作主項は生起していない。実際それを明示すると容認性が下がる。

- (13) 技術革新という用語については、その専門家 {*に / *によって / ?*による} 色々な用いられ方がされている。

降格型の直接受身文では、構文的特徴として、習慣的現在と動作主の不特定性が連動することがある。志波 (2015: 38, 42) も次の例でこの点を指摘している。

- (14) 糖尿病は生活習慣病の一つだと {される / 言われる / 考えられている}。

³ 実際には、以下のように状態変化動詞が生起する例も Web 上に見られる。従って、「対象への影響性の低さ」という基体動詞の特徴は、「Vラレ方ガサレル」という構文形式に見られる一般的「傾向」に過ぎない。しかし、「壊れる」が生起する例はこの例を含む2例のみであったこと、またBCCWJのような均衡コーパスではそうした動詞が全く生起しないことを鑑みると、基体動詞が影響性の低い行為を表すという点は、当該構文形式の典型的特徴と言えるだろう。

- (i) そのような壊され方がされていることは、合格した技術者から聞いていたので段チャックに噛み歪になった穴をバイトで削って直しました。 (http://technoswiss.co.jp/?page_id=1694)

志波 (2015: 264-315) は、この種の受身文を、ある社会的な範囲における不特定多数の人々の習慣的な活動を表すと特徴づけ、「習慣的社会活動型」の受身と呼んでいる。V ラレ方ガサレル形式においても、ある事態が習慣的に成立することを報告することに重点が置かれ、個別具体的なアクチュアルな出来事を表していないという特徴が見受けられる。

3.2.2. V ラレ方ヲサレル

次に、V ラレ方がヲ格名詞として生起する間接受身の事例を考察する。(15) から (17) を見てみよう。基体動詞のタイプを見ると、「言う」のような発話動詞、「使う」のような使用・活用動詞だけでなく、「書く」のような動詞も観察される。用例全体を見渡してみると、発話動詞「言う」「呼ぶ」(計 6 例)、使用・活用動詞「使う」「用いる」「扱う」(計 6 例)、その他「書く」「描く」「読む」(各 1 例、計 3 例) という結果であった。

(15) さて、そういった中で、EU につきましては確かに経済の面から始まってその他の面につきましてもずっと**統合が進んでいって、ある意味じゃフュージョンじゃないか、融合じゃないか**という言われ方をされるところもございますけれども…

(BCCWJ, 参議院『国会会議録第 139 回国会』)

(16) **カラカラ**とは、泡盛を飲むときによく使われる沖縄の伝統的な酒器である。甕から古酒を酌み出してカラカラに入れ、それから小さなおちょこに酒を注ぐ。昔から、そういう使われ方をされてきた。

(BCCWJ, 星野亮『異界の森の夢追い人』)

(17) その日の『毎日新聞』には、こんな記事が出ている。「警視庁は復興が遅れてゐる原因は物質的なものだけでなく、都民生活の裏面にダニのやうに食ひ込んでゐる幾多の障害があるとして… (中略)。警視庁がこれら復興を妨害する実情に対して、先づ悪徳露店を徹底的に取り締まる方針である」あの予感に人の胸を震わせた露店市が、たった一年足らずでこんな書かれ方をされるようになっている。

(BCCWJ, 田中聡『地図から消えた東京遺産』)

収集した例を見る限り、「V ラレ方ガサレル」と同様、対象の状態変化を表すような、影響性の高い行為を表す動詞は観察されない。また、「A を B と 言う、呼ぶ、書く」のように動作による認識・把握・評価を表すことが特徴的である。実際、Google 検索による Web 上の用例を見てみると、「捉えられ方をされる」「受け止められ方をされる」「(～的な / ～という) 見られ方をされる」といった主体の認識・評価を表す動詞が多数使用されている。

基体動詞が選択する対象項を見てみると、(15) から (17) の太字の箇所が示すように、受身文の主語として生起している。またその解釈についても、(16) の例が示すように、必ずしも迷惑の解釈が生じない (他の 2 例は文脈から主体が迷惑を被ることが読み取れるかもしれないが、利益を被る文脈の作例も可能)。このため、間接受身のうち所有受身であると判別できる。すなわち、主語が表す主体が「所有者」、方名詞が表す事態を「所有物」と位置

づけるのがこのタイプである。この形式と意味の対応は、次のようにパターン化できる。

- (18) NP-ガ_{SUBJ} V ラレ方-ヲ_{OBJ} サレル
 <対象・所有者> <事態・所有物>

また、述語のテンス・アスペクトについては、(1b)「呼ばれ方をされた」のように単純過去のみであれば、(16) テクルや (17) のパーフェクトのテイルといった形式も見られ、完了的で、アクチュアルな出来事を表しうることが分かる。さらに、BCCWJからの用例では動作主項が生起するものは見当たらなかったが、Web上では、次の例のように二格動作主項が生起している例もある。

- (19) カップルによって、様々呼び方があるようですが、呼ぶ方はいいけれど呼ばれる方はまったくもってよくは思っていない場合もあるんですね。(中略)「嫌だなあ」と思う呼ばれ方を恋人にされた際は、きちんとその気持ちを伝えましょう！

(<https://woman.mynavi.jp/article/150604-17/>)

「V ラレ方ヲサレル」が一般的な事態の存在だけでなく、アクチュアルな出来事をも表しうることが分かる。この点は、「V ラレ方ガサレル」とは異なっていて興味深い。

3.2.3. まとめ

以上、「V ラレ方ガサレル」と「V ラレ方ヲサレル」という形式がもつ文法的特徴について観察した。それぞれの特徴は、表2のようにまとめられる。

	V ラレ方ガサレル	V ラレ方ヲサレル
受身文としての分類	降格型直接受身	所有受身
方名詞の基体動詞が表す行為	使用・活用、発話 (対象への影響性：低)	使用・活用、発話、認識・判断 (対象への影響性：低)
基体動詞の対象項の統語的資格	話題や修飾語、省略された項	主語
テンス・アスペクト	ル形・習慣的現在	指定なし
出来事のタイプ	主に非アクチュアル	アクチュアルも可
動作主の明示	容認されにくい	容認可能

表2 ラレの二重標示を伴うV方ヲスル構文の文法的特徴

4. V方ヲスル構文の解釈メカニズムと二重標示の動機づけ

本節では、3節での観察を踏まえて、V方ヲスル構文で受身ラレの二重標示がなぜ可能な

のか、また二重標示はどのような動機づけで使用されるのかについて考察する。

言語研究の様々な分野において、一つの文法的素性が複数の要素として具現する現象は数多く知られている。例えば、英語の派生形態論において、句動詞が複合語を形成する場合、動詞と副詞小辞 (particle) の両方に派生形態素が付く場合がある (例: *putter-inner* (< put in), *taker-outer* (< take out) (Szymanek 2015: 150))。また、その考察の対象となる現象は、基本的に語レベルのものが多いが、「同語反復 (tautology)」の観点から *each and every* や *business is business* のような句や文レベルの現象が取り上げられることもある。

V 方ヲスル構文でも受身のラレが反復して用いられるが、注目すべきはその意味解釈である。英語の *over-overcome* 「克服し過ぎる」や日本語の「太郎が次郎に赤ん坊を歩かせさせた」のような表現では、反復する形式それぞれが別個の意味を表し、二つの形式が二つの意味に対応する。これに対して、V 方ヲスル構文のラレの二重標示は、二つの受身的な事態が生じるのではなく、単一の受身的事態として解釈される。つまり、先に述べた句動詞複合語における -er の二重標示と同様に、ラレの数と意味が一对一で対応していないのである。実際、(20) において、(a) の一重標示も (b) の二重標示も、文の知的意味は変わらない。

- (20) a. それは色々な使い方 {が/を} される。 / それは色々な用いられ方をする。
b. それは色々な用いられ方 {が/を} される。

二つのラレが一つの受身を標示する点に関して、小栗 (2021) の分析が一つの説明を与えている。小栗 (2021) では構文文法理論 (Construction Grammar, Goldberg 1995 など) の枠組みで、V 方ヲスル構文の意味を方名詞と構文の意味的合成 (fusion) の観点から分析している。特に、V 方ヲスル構文が出来事を表す場合、方名詞の事象の意味が、軽動詞スルの意味との合成を通じて、構文全体の解釈に継承されていると主張した。つまり、「V 方」の基体動詞の事象解釈が文の事象解釈へと引き継がれるのである。特に、方名詞が表す事象タイプを表し、一方、軽動詞スルがテンス・アスペクト・ムード等の特性を明示するによってそれを具体化する。例えば、「いい走り方をした」という表現では、「いい走り方」という事象のタイプがシタによって完結的でアクチュアルな事象として具体化される。

事象合成分析の根拠として、小栗 (2021) では、(i) 基体動詞の事象が成立したことをキャンセルする文が後続できない (例: *太郎は変な走り方をしたが、走らなかった。) こと、(ii) 基体動詞と同じ意味役割の項が生起する (例: 監督は、部活で生徒に「ばかやろう」と {厳しい叱り方をする / 厳しく叱る}) こと、(iii) 方名詞句内のヴォイス標識の意味が文全体へ引き継がれること (藤巻 2020: 34, 脚注 18) を挙げている (詳細は小栗 2021 を参照)。

さらに、事象合成分析では、「*この花瓶は変わった壊れ方 {を/が} されている」が容認されないのも、方名詞の基体動詞「壊れる」が表す自発的事象が、ヴォイス的特性に関して、サレテイルという受動動詞の表す事象の特性と合致しないためだと説明される。

方名詞とスルの事象合成分析に基づく、V 方ヲスル構文で受身ラレが二重に生じ、かつ

その意味が単一の受身として認識できるという事実は、次のように説明できる。つまり、V方ヲスル構文の意味解釈において、「V方」とスルの両方が文の出来事解釈に寄与するため、その両者の形態的標示で文全体のヴォイス的意味を表すことができる。このため、(20)のように、方名詞とスルのどちらか一方にラレが付加した一重標示も、両方にラレが生起する二重標示も、文の知的意味は変わらないのである。

しかし、3.1節で見たように、コーパスで観察される二重標示の用例は、他の一重標示のものに比べ、使用頻度がかかなり少ない。これは自然言語一般に見られる「経済性」の原理に反するためと考えられる。ある意味を表す場合、一つの対応する形式で表すことが理想的な表現方法であり、複数の形式で表すことは言語記号を余分に用いる点でコストがかかる。従って、二重標示という手段は、本来文法体系内で忌避されることになる。二重標示の用例数が0.75%とかなり限定的なのは、この自然言語の経済性の原理に反するためと考えられる。

経済性の原理に反してラレの二重標示が許される場合、何らかの動機づけが必要となる。先行研究では、二重標示現象を可能にする要因として様々なものが指摘されている。例えば Lehmann (2005: 126-135) では *intensity, emphasis, rhematicity, safety, verbosity, concord* といった複数の要因を挙げている。実際、V方ヲスル構文のラレの二重標示に関しても、受身の意味の「強調 (emphasis)」という効果が感じられる。

しかし、強調以外の要因として、本稿では、事態把握における「視点の一貫性」を重要な要因であると本稿では主張したい。久野 (1978) に代表されるように、日本語受身文の研究では視点の問題が度々取り上げられる。例えば、「*太郎は私に殴られた」のように、一人称代名詞を差しおいてそれ以外の名詞が受動文主語に立つことを日本語は嫌う傾向にある。これは、受身文において、被動作主主語を視点の中心（視座）とした事態把握がなされるため、話者の視点を反映させる一人称名詞は、主語以外の位置に置くことはできないのだと説明される。

日本語受身文における視点の特性を考慮すると、V方ヲスル構文においてラレの一重標示では方名詞とスルが異なるヴォイス標示となり視点が一貫せず、文を理解する聞き手にとって処理に負荷がかかるものと思われる。例えば、「太郎の本は、「傑作本」という{言い方をされている / 言われ方をしている}」という一重標示の受身文において、「言う」と「する / される」がヴォイスのタイプに関して対立している。本稿の分析では両者の意味を合成・統合した結果、文全体として「言われた」という解釈となるが、合成の際に異なるタイプの事象を合成することになるので、意味解釈における処理に負荷がかかることになる。そこで、話者によっては、基体動詞と軽動詞のヴォイス形式を一致させることで、事象の合成プロセスに伴う負荷を軽減させ、聞き手への配慮を行う場合もあるだろう。つまり、「太郎の本は、「傑作本」という言われ方をされている」は、「言われ方」と「されている」が同じ受身の事象を表すので、両者の事象合成が合理的、経済的に行われることになる。このように、方名詞と軽動詞スルとの事象合成に関する聞き手配慮を動機として二重標示が行われるのだと考えられる。但し、こうした二重標示は一つの意味を二つの形式で表すことになる

ので、先述の通り、形と意味の対応の観点からは経済的ではない。このため、用例としては自然に受け入れられるものの、実際の使用の頻度は少ないという結果になるのだろう。

5. 結論

以上、本稿では V 方ヲスル構文において、方名詞と軽動詞スルの両方に受身ラレが生起する事例を観察し、その使用実態を記述的に明らかにした。また、二重標示が可能となる理由について、方名詞と軽動詞スルの事象合成という分析に基づいて検討した。さらに、二重標示の使用を動機づける要因として、視点の一致という観点から試案を述べた。

本稿で示したように、ラレの二重標示という現象は、V 方ヲスル構文という軽動詞構文の解釈に事象合成というプロセスが深く関わっている。今後の課題として、ラレの二重標示という現象が、日本語の他の軽動詞構文においても見られるのか、調査をする必要がある。これによって、先行研究で問題とされてきた軽動詞構文一般の文法的特性の解明につながることを期待される。また、紙幅の都合で取り上げられなかったが、韓国語やトルコ語などにも受身の二重標示現象が観察されるという。そうした言語と日本語との言語間比較も別の機会に譲ることとする。

参考文献

- 藤巻一真 (2020) 「方をする」構文—意味と統語の記述を中心に— 『神田外語大学紀要』 32: 19-39.
- Goldberg, Adele (1995) *Constructions: A construction grammar approach to argument structure*. Chicago: University of Chicago Press.
- 小薬哲哉 (2021) 「V 方ヲスル構文における解釈の二重性—構文文法的アプローチ—」 『日本語文法学会第 22 回大会予稿集』, 40-47.
- 久野暲 (1978) 『談話の文法』 東京: 大修館書店.
- 久野暲 (1983) 『新日本文法研究』 東京: 大修館書店.
- Lehmann, Christian (2005) Pleonasm and hypercharacterisation. In Booij, Geert E. and Jaap van Marle (eds.) *Yearbook of Morphology 2005*, 119-154, Dordrecht: Springer.
- 益岡隆志 (1987) 『命題の文法』 東京: くろしお出版.
- 宮腰幸一 (2014) 「受動文の受害性の起源について」 『日本語文法』 14(1): 54-70.
- 宮腰幸一 (2020) 「日本語受動の類型論」 『言語研究』 157: 113-147.
- 志波彩子 (2015) 『現代日本語の受身構文タイプとテキストジャンル』 東京: 和泉書院.
- Szymanek, Bogdan (2015) Remarks on tautology in word-formation. In Bauer, Laurie, Livia Körtvélyessy and Pavol Štekauer (eds.) *Semantics of Complex Words*, 143-161, Cham: Springer.
- 寺村秀夫 (1982) 『日本語のシンタクスと意味 I』 東京: くろしお出版.
- Washio, Ryuichi (1993) “When causatives mean passive: A cross-linguistic perspective, *Journal of East Asian Linguistics* 2: 45-90.

現代日本語条件文の条件節の分布にもとづく分類*

瀬戸 義隆

1. はじめに

条件文の機能の特徴的な点は、従属節で条件が提示されるという点にあり、従属節の分類が様々な観点から盛んになされてきた(南 1974、中島 2007、前田 2009 など)。本研究では、Token-based semantic vector space (以下、SVS) を用いて、現代日本語で従属節と主節を接続する条件標識として接続助詞の「バ」を用いる条件文(以下、バ条件文)の従属節の各用例に生じる語彙の分布情報をもとに、バ条件文の従属節の分類を試みる。第2節では、SVSの概要と本研究での分析手法、第3節では分析の結果、第4節では考察と結論を述べる。

2. 分析手法とデータ

近年では、大規模コーパスの発展によって大量のテキストデータが入手可能であり、それらを用いた言語研究が進んでいる。そのような研究の過程では多くの場合、分析者が設定した特定の意味・機能的な分類基準をもとにして、分析対象の言語表現を含む用例にアノテーションを施すという方法がとられる。そのような分析における問題点のひとつとしてアノテーションの基準が主観的になる可能性が挙げられる。このような問題に対処するためのひとつの方法としてSVSがある。以下、2.1節ではSVSの概要を述べる。

2.1. Semantic vector space

SVSの特徴は、特定の言語表現の文脈語との共起関係をもとにして、考察対象となる言語表現間の類似性をもとに、それらの言語表現の距離を捉える点にある。この類似性は、分析対象の言語表現と文脈語の頻度情報をもとにして得られ、分析者による手作業のアノテーションを分析の過程として含まないため、主観的なアノテーションを避けること、および、大量の言語データの分析が可能である。SVSは、特定語彙の性質はコロケーションの検討により明らかになるというFirth(1957: 11)の考えを根底としている。

SVSには、type-based SVSとtoken-based SVSの2種類があり、本研究では後者を採用するが、token-based SVSの作業過程の一部としてtype-based SVSも含まれる。これはtoken-based SVSがtype-based SVSの短所を補うための手法として開発されたという点に関連している(詳しくはHeylen et al. (2015)を参照)。

SVSは主に、コーパス内の言語表現間の共起表の作成、分析対象となる言語表現の分布の類似度の算出と、その視覚化という段階から構成される。本研究の分析手法は主に、Heylen et al. (2015)とHilpert and Saaavedra (2017)に基づく。

*本研究は JSPS 科研費 19K13189 の助成を受けたものである。

2.2. 分析: 「犬」「猫」「机」

Token-based SVS の最初の過程では、考察対象となる言語表現をキーワードとして設定し、コーパス内の用例を取得した上で、それらのキーワードの左右に生じる特定範囲内の文脈語 (cw_1) を取得し、共起頻度表を作成する。その後、 cw_1 を新たなキーワードとして設定し、コーパス全体から cw_1 の特定範囲内の文脈語 (cw_2) の共起頻度表の作成という過程を踏む。

ここでは、「猫」、「犬」、「机」の3つの名詞の意味的類似性の検討を例として分析の過程を示す。ここでは、以下の作例を対象とするが、通常、コーパスの用例を対象とする。それぞれ太字が考察対象のキーワードを表す。

- (1) a. 尾の短い**犬**は、撫でられると喜んだ。
- b. 尻尾を触られた**猫**は、とても怒った。
- c. 部屋の**机**を開いて、ペンを取り出した。

次の行程では各キーワードと、その左右に直接生じる一次共起語 (first-order occurrences 以下、 cw_1) の共起表を作成する。通常、機能語などの高頻度語は文脈語から除外し、内容語のみを文脈語とする。上の例では、キーワードから左右5語以内の範囲にある名詞・形容詞・動詞を cw_1 とした。表1は行に各キーワード、列に cw_1 を含む。

	尾	短い	撫でる	喜ぶ	尻尾	触る	怒る	部屋	開く	ペン	取り出す
(1a) 犬	1	1	1	1	0	0	0	0	0	0	0
(1b) 猫	0	0	0	0	1	1	1	0	0	0	0
(1c) 机	0	0	0	0	0	0	0	1	1	1	1

表1 キーワード・一次共起語頻度

cw_1 にもとづく分析の問題点は用例中に生起する cw_1 が限定的である点にある。表1のように表内のセルは、ほとんどが頻度がゼロで、共通した語彙もない。また、頻度がゼロでなくても、共起頻度は低い。このデータの不足は分析に影響を及ぼす可能性があるため、token-based SVS では cw_1 を新たなキーワードとして、コーパス全体から cw_1 を含む用例から二次共起語 (second-order cooccurrences, 以下、 cw_2) を抽出し、キーワードの間接的な共起語として想定するという方法をとる。

	顎髭	散らかる	インク	ちぎれる	頭	脚
尾	0	0	0	0	45	2
短い	1	0	0	0	18	19
撫でる	7	0	0	1	238	3
喜ぶ	0	0	0	0	2	0
尻尾	0	0	0	12	33	1
触る	0	0	0	0	10	3
怒る	0	2	0	0	9	0
部屋	0	32	0	0	7	3
開く	0	1	1	0	26	56
ペン	0	0	15	0	0	0
取り出す	0	0	1	0	5	0

表 2 一次・二次共起語頻度

表 2 は行に cw_1 、列に cw_2 の一部を含む。この表は、 cw_1 とコーパスに生起する cw_2 の共起頻度を示すため、表 1 の問題である共起頻度の低さは解消される。次の段階として、 cw_1 と cw_2 の共起強度を測定するために、Positive Point-wise Mutual Information (PPMI) を用いる。PPMI は PMI という共起強度指標を基盤としており、 cw_1 と cw_2 の PMI は (2) のように求められる。PPMI は、PMI が負の値をとる場合、その値を 0 に変換することで求めることができる。表 3 は、そのようにして得られた PPMI を示す。例えば、表 3 の cw_1 の「撫でる」の行は、「顎髭」、「頭」のような動作の対象となる意味的に結びつきの強い語彙と高い PPMI を示すということを表す。また、「尾」、「尻尾」は、「頭」「脚」が cw_2 の際、それぞれ、近い PPMI の値を示しており、分布の類似性も捉えやすくなる。

$$(2) \quad \text{PMI}(cw_1, cw_2) = \log_2 \frac{cw_1 \text{ と } cw_2 \text{ の共起頻度}}{cw_1 \text{ と } cw_2 \text{ の共起頻度の期待値}} \quad (\text{cf. Levshina 2015: 327})$$

以下の表 3 では複数行にわたって、各用例の一次共起語が示されているが、分析の目的は (1a-c) の「犬」「猫」「机」の意味的距離を把握することであるため、次の段階として、各用例を一つの行として表した上で、それぞれの距離を捉える。そのためにまず、キーワードと cw_1 の PPMI を求め、その PPMI を各列に示される cw_1 と cw_2 の PPMI に乗算する。このことで、キーワード、 cw_1 、 cw_2 の結びつきの強さを反映させた値が得られる。そこから、共通した用例に生起する cw_1 と cw_2 に関する PPMI 平均値を、該当する用例でのキーワードの分布を示す表が得られる。例えば (1a) の文脈語の分布を示す値は次のように求められる。

	顎髭	散らかる	インク	ちぎれる	頭	脚
尾	0.00	0.00	0.00	0.00	4.70	3.61
短い	3.65	0.00	0.00	0.00	0.56	4.04
撫でる	8.53	0.00	0.00	5.20	6.35	3.45
喜ぶ	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00
尻尾	0.00	0.00	0.00	9.34	4.06	2.42
触る	0.00	0.00	0.00	0.00	0.84	2.50
怒る	0.00	4.73	0.00	0.00	0.00	0.00
部屋	0.00	6.79	0.00	0.00	0.00	0.00
開く	0.00	1.69	0.62	0.00	0.00	3.86
ペン	0.00	0.00	9.55	0.00	0.00	0.00
取り出す	0.00	0.00	2.78	0.00	0.00	0.00

表 3 二次共起語 PPMI

- (3) a. 「犬」(キーワード) と「尻尾」(cw_1) の PPMI を求める (PPMI = 5.43)
- b. キーワードごとに表 3 の「尻尾」の行の各列に (3a) の PPMI を乗算
- c. 各用例の cw_1 に関して cw_2 の値を平均した表の作成

上の処理の結果、(1a-c) における各キーワードの共起語分布を表 4 のように表した上で、各用例の分布の類似度をコサイン類似度によって求めると、それぞれの位置関係は図 1 のように視覚化される。

	顎髭	散らかる	インク	ちぎれる	頭	脚
(1a) 犬	3.18	0.59	1.25	6.36	6.13	4.74
(1b) 猫	4.22	0.84	0.02	6.99	6.89	4.84
(1c) 机	0.00	1.89	5.26	1.63	0.71	0.42

表 4 各用例の分布値

図 1 では、(1a) と (1b) の「猫」「犬」をキーワードとして含む用例が隣接して位置しており、(1c) の「机」は、その 2 つから離れた位置にある。動物である「猫」と「犬」が近い位置に生じ、物体である「机」が遠い位置にあることは、直観的に理解しやすいと考えられる。このように、token-based SVS を用いて、キーワードとなる表現とその文脈情報にもとづいて、その意味的關係を捉えることが出来る。

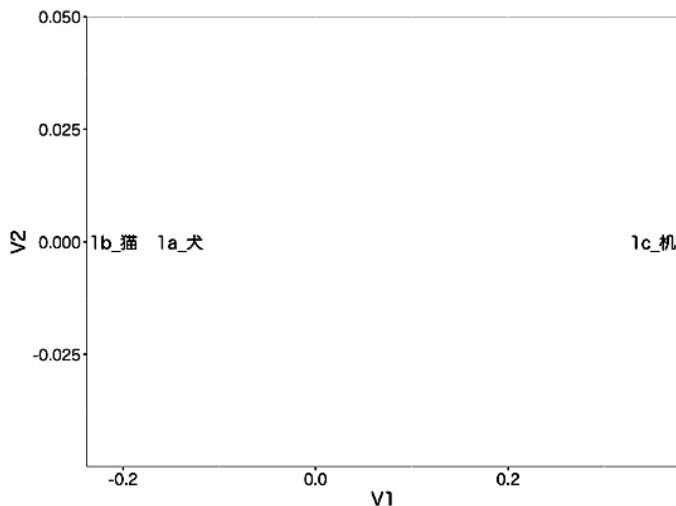


図 1 犬・猫・机の意味関係

3. Semantic vector space を用いたバ条件節分析

前節では SVS が 3 つの名詞に関して文脈語の情報から、それぞれの語彙を分類出来ることを見たが、本節では、従属節と主節が接続助詞の「バ」で接続される条件文 (以下、バ条件文) の従属節を SVS で分類を行う。

3.1. データと分析手法

バ条件文の用例は『日本語書き言葉均衡コーパス有償版』 (国立国語研究所 2012) から接続助詞バの左側に生起する 1 語 (L1) が仮定形の活用形で表される語彙を含むものを抽出した。その中から、代名詞・連体詞・接続詞・感動詞・接頭辞・接尾辞・助動詞・記号、および、従属節の接続助詞バを除いて、従属節内に最低でも 3 語の語彙を含む用例から 273 例を無作為抽出し、SVS の処理を行った。分析にあたっては、処理上の問題により、コーパス内に含まれる上記の品詞以外の上位 2 万語および助詞のみを分析に用いた。その後、前節でとった方法にしたがい、上記のコーパス内に含まれる対象の語彙の共起頻度表と PPMI 表を作成した上で、それぞれの用例に含まれる語彙とその文脈語の情報から、それぞれの用例の語彙分布表を作成した。その分布表から、各用例の類似度をコサイン類似度にもとづいて算出した上で、それぞれの意味的距離を多次元尺度構成法によって視覚化した。プロット上に配置された用例の分類には k 平均法を使用した。分析には、統計ソフトウェア R (R Core Team 2021) を用いた。

3.2. 結果

分析の結果は現代日本語のバ条件文の従属節の用例は、図 2 のように 5 つのクラスターに分類可能であることを示す。図中の右端の凡例は、それぞれ対応するクラスターの番号を示す。プロット上のマーカーの大きさは、各用例における接続助詞「バ」と、その cw_1

の PPMI の最大値を表しており、バ条件節との関連性の高さを反映する。以下、それぞれのクラスターの特徴について述べる。

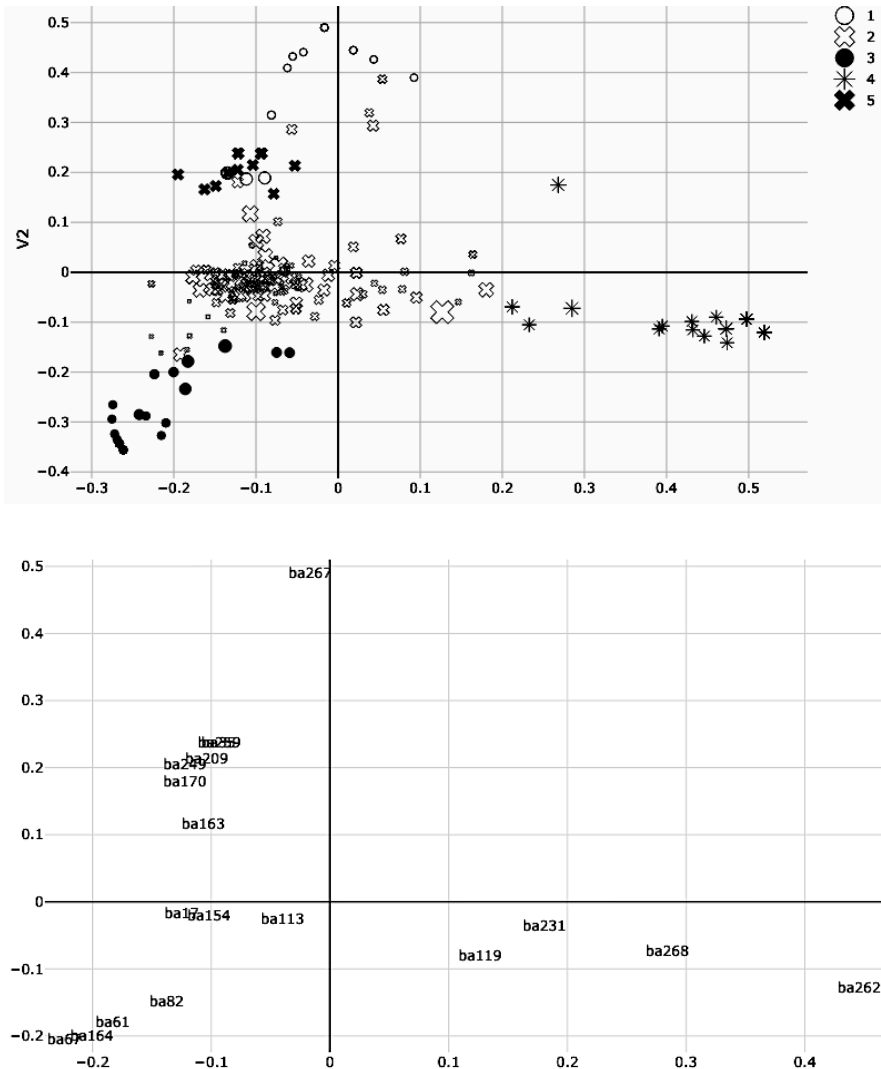


図 2 バ条件文従属節のクラスター分布

3.2.1. クラスター1

クラスター1は29の用例から構成され、図の中央上部に位置する用例は「する」、クラスター5と隣接した位置の用例は「出来る」を含む。¹ このクラスターに属するすべての用例は、 cw_1 として「する」、もしくは「出来る」を含む。そのうち、「出来る」(PPMI=1.76)のPPMIは「する」(PPMI=0.68)の場合よりも高い。(4)は cw_1 に「する」のみを含む用例であり、図の最上部に位置づけられる。下線部は用例中の cw_1 の最大値を示す語

¹ 図2では一部の用例が表示されていないが、これは、同じ座標上に存在する用例が複数存在することによる。このような状況は、他のクラスターにも見られる。

彙、角括弧は、その PPMI の値を示す。

- (4) どのようにすれ [0.68] ば... (ba267)²

3.2.2. クラスタ-2

クラスタ-2 は 149 の用例を含み、5 つのクラスタの中で最も多く用例を含む。クラスタ-1 よりも、各用例で最も高い PPMI を示す語彙の種類は多く、各用例の PPMI の最大値の幅も大きい。このうち、5 つの用例を除き、全て L1 の位置に生じる動詞が用例中で最大の PPMI を示す。図 3 に示されるように、PPMI が 1.00 以上の値を示す語彙を含む用例は V1 軸の-0.1 付近に集中しており、(5ab) のような例が挙げられる。

- (5) a. 換言すれ [6.06] ば、それは... (ba154)
 b. とにかく砂糖をたくさん [0.01] 入れれ [5.09] ば... (ba17)

クラスタ-2 には、直観的に条件文と関連性の高いと推測される文脈語も見られる。その 1 つとして「もし」を含む (6) が挙げられる。

- (6) もし [2.11] 心配ならば... (ba113)

(6) は「バ」と高い PPMI を示しており、条件節との関連性が高いことを示す。

3.2.3. クラスタ-3

クラスタ-3 は 30 の用例を含み、各用例は「有る」「無い」など、存在に関する語彙を含む。必ずしも、その 2 つの語彙が用例中で最大値の PPMI を示すわけではなく、「暇」、「戦」のような存在対象を示す名詞が、用例中の cw_1 で最も高い PPMI を示す場合もある。

- (7) a. 暇 [1.96] があれ [0.80] ば二人は肩を並べて話をした。(ba82)
 b. 戦 [1.71] があれ [0.80] ば身体を張って村を守ったでしょう... (ba61)

このような例は、バ条件節との関連性が高く、存在を示す表現とも関連性が高い (PPMI (暇, 有る)=2.24) ことから、このクラスタでの典型例と考えられる。

このクラスタでは、存在対象物が関連した意味を示す用例が存在する場合、それらの用例が近接した位置に配置される。例えば、次のような例が見られる。

² 本研究では「ナラバ」の形式を含む用例もバ条件文に含めた。

- (8) a. いくらぐらいお金 [1.09] が [0.18] あれ [0.80] ば遊べるのか... (ba164)
 b. それどころか機会 [0.99] さえあれ [0.80] ば... (ba67)

「お金」と「機会」は、何らかの好機が存在することを示すという点で意味的に共通性が見られることから、同じクラスターに含まれる用例のうち、近い意味を示す用例は、近い位置に配置されることを、これらの例は示している。

3.2.4. クラスター4

クラスター4は、47例から構成され、1例を除いて「言う」という語彙を含む。そのうち、「言う」が最も高いPPMIを示す (PPMI=1.76) ものが31例、「そう」という語彙が「バ」とは最も高いPPMIを示し (PPMI=1.98)、「そう言えば」という形式で示される例が14例存在する。「そう」と「言う」のPPMIが1.98であることを考えると、「そう」と「バ」、「そう」と「言う」がそれぞれ、高いPPMIを示すことで、それら全ての語彙を含む「そう言えば」という表現が、バ条件文の従属節の中で特徴的な例として存在することがうかがわれる。

今回の分析対象では、特定の人物の発言に関する仮定条件を示す例ではなく、次のように、主節に示される発言内容の前置きとして述べられる用例が多く見られる。

- (9) a. あえて [1.99] いえ [1.76] ば仁斎の古義学はそれによって基本的に成立する... (ba225)
 b. ひと言 [2.51] でいえ [1.76] ば、時代が変わったからです。 (ba268)
 c. はっきり [0.54] 言え [1.76] ば、彼女は皇室に敵意を抱いている。 (ba262)

クラスター4での各用例の生起位置には、V1軸の0.3付近から0.4付近にかけて空白の位置が見られるが、0.3よりも左側では、(9ab)のように cw_1 が「言う」と「バ」のPPMIの値に勝る語彙を含む用例、0.4よりも右側では、「言う」が cw_1 の中で最も「バ」とのPPMIが高い要素として含む用例が存在するという特徴が見られる。また、クラスター4に隣接したクラスター2として分類された用例にも「言う」を含む用例が存在する。

- (10) a. しいて [5.02] 言え [1.76] ばズキンズキンって感じでしょうか。 (ba119)
 b. 簡単に [2.08] 言え [1.76] ば... (ba231)

(10a)は「バ」と高いPPMIを示すとともに、「言う」とも高いPPMI (4.24)を示す。(10b)では、それに比較すると、「言う」とのPPMIは低い値 (1.00)を示す。この場合、(10a)がクラスター2の中心側に位置するということを考えると、 cw_1 と「言う」および「バ」のPPMIとの関連性がクラスターの分類に関与していると考えられる。

3.2.5. クラスター5

クラスター5は18の用例を含み、1例を除いては接続助詞バのL1の位置に動詞の「成る」が生起し、すべての用例において、この語彙がcw₁において「バ」とのPPMIの最大値を示す(PPMI = 1.21)。他のクラスターと同様、同じような統語環境や意味を示す用例は近接した位置に配置されている。

- (11) a. 就職して企業人と [0.19] なれ [1.21] ば... (ba259)
- b. “東京ジャーナリズム”が流れを収斂するきっかけ [0.02] となれ [1.21] ば... (ba35)
- c. ご覧 [0.46] になれ [1.21] ばわかりますように ... (ba249)
- d. この魔法書の術を知る [0.22] ようになれ [1.21] ば ... (ba209)

(11a-d)のうち、(11ab)は「となれば」という表現が一致していることにより同じ座標位置に生じ、(11cd)では「ご覧」と「知る」という表現に示される動作や状態が引き起こされることを仮定しているという点で類似性が見られることから、近接した位置に生じていると考えられる。

クラスター5の下部には、クラスター2が位置しており、その中に「成る」を含む用例が2例存在する。

- (12) a. 出ていく [1.00] ようになれ [1.21] ば、私たちは... (ba170)
- b. 株に興味がある人の助け [2.45] になれ [1.21] ば幸いです。 (ba163)

(12a)では移動動作をとることが従属節で示されており、特定の動作が起こるという変化を表現する点については(11cd)と意味的に関連しており、生起位置も(11cd)と近接している。(12b)は発話者のアドバイスが役立つことが従属節で仮定されており、「になる」という表現を含むため、クラスター5に分類されても自然であると考えられるが、クラスター2に分類される背景には、cw₁のPPMIが関連していると推測される。(11a-d)のクラスター5に含まれるcw₁の「成る」以外のPPMIと、クラスター2の(12ab)のものを比較すると後者のcw₁がより高いPPMIを示す。このことから、「成る」という表現をL1を含む用例で、「バ」と高い関連性を示す項目をcw₁に多く含むと、クラスター2へと近づくという状況が背景にあると考えられる。

4. 考察と結論

上記の結果は、バ条件文の条件節は生産性の違いを示すクラスターから構成されること、また、それぞれのクラスターが連続的であることを示す。

接続助詞の「バ」と関連性の高い語彙を多く含むクラスターとして、クラスター2が挙げ

られるが、先に見たように、このクラスターには他のクラスターと共通の語彙を文脈語として含む用例が存在する。例えば、クラスター5は「成る」、クラスター4は「言う」という語彙を中心としたクラスターだが、クラスター2にも「成る」、「言う」を含む用例が存在することが指摘された。そのような場合、クラスター2は cw_1 として「成る」「言う」よりも「バ」と高い PPMI を示す文脈語を含んでいる。つまり、クラスター2には、バ条件文の条件節全体の用例を含むこととなる。クラスター2の各用例中で「バ」との PPMI が高い語彙は L1 に多く、その語彙のタイプ頻度は高いため、意味的な一貫性を規定することは困難である。それに対して、クラスター1, 3, 4, 5 についてはそれぞれ、中心となる L1 の種類は限定的で、「行為・可能」、「存在」、「発言」、「変化」という意味的な一般化が可能である。このように、クラスター2と、それ以外のクラスターでは、生産性 (Barðdal 2008) の違いがある。

クラスターによってバ条件節と関連性が高い語彙について生産性の違いがあると同時に、上で見たように、2つのクラスターにおいて、片方のクラスターが、他方のクラスターに特徴的な語彙を含む場合もあることから、明確な境界線を各クラスターの間に引くことは難しく、連続的にクラスターが存在していることを本研究の結果は示している。

SVS を用いた本研究の成果として、バ条件文の条件節が 5 つのクラスターに分類されること、その分類されたクラスターにおける特徴的な語彙には生産性の違いがあること、それぞれのクラスターは連続的に構成されることが明らかになった点が挙げられる。

参考文献・ソフトウェア

Barðdal, Jóhanna (2008) *Productivity: Evidence from case and argument structure in Icelandic*.

Amsterdam: John Benjamin Publishing Company.

Firth, John R. (1957) A synopsis of linguistic theory. *Studies in linguistic analysis*. 1-31.

Heylen, Kris, Dirk Speelman, Thomas Wielfaert, Dirk Speelman and Dirk Geeraerts (2015)

Monitoring polysemy: Word space models as a tool for large-scale lexical semantic analysis. *Lingua* 157: 153-172.

Hilpert, Martin and David C. Saaavedra (2017) Using token-based semantic vector spaces for corpus-linguistic analyses: From practical applications to tests of theoretical claims. *Corpus Linguistics and Linguistic Theory*. 1-32.

国立国語研究所 (2012) 『現代日本語書き言葉近郊コーパス有償版』東京: 国立国語研究所.

Levshina, Natalia (2015) *How to do linguistics with R: Data exploration and statistical analysis*.

Amsterdam: John Benjamin Publishing Company.

前田直子 (2009) 『日本語の複文-条件文と原因・理由分の記述的研究』東京: くろしお出版.

南不二男 (1974) 『現代日本語の構造』東京: 大修館書店.

中島悦子 (2007) 『条件表現の研究』東京: おうふう.

R Core Team (2021) *R: A language and environment for statistical computing*. Vienna: R Foundation for Statistical Computing.

「V1+込む」の多義分析における 多使用論的アプローチの有効性についての検討

蘇 暁笛

1. はじめに

日本語の語彙的複合動詞の中に、「～込む」と結合する前項動詞の数が一番多く、特殊な存在であると多くの研究で言及されている(姫野 1999、松田 2004、陳・松本 2018)。例 (1)～(4)のように、「V1+込む」は前項にくる動詞の意味特徴、使用文脈によって、全体の意味解釈が異なる。

- (1) 粒ジャムは、なるべく外側に出ないように生地の中に入れ込む。¹
- (2) さらに磨き込むことで鏡面のような光沢が得られます。
- (3) 私の年で痩せると、一気に老け込むのがこわいのですが、サイズダウンしたおかげで、今まで諦めていたショップの服も着れるようになり、若返った気がします。
- (4) a. 売り上げは 08 年は 5400 万円、今年は 7000 万円を見込んでいる。
b. このツアーが気に入ったかたは、フリーの日にどきどきの動物探検系のツアーも申し込むと良いと思います。

例 (1) では、「粒ジャム」という「移動物」、「生地の中」という「移動先」、また、必須項ではないが、「外側に出ないように」という目的が文脈上明示されている。「入れ込む」という行為によって、「粒ジャム」が「生地の中」から出ないようにするという事柄を表す。それに対し、例 (2)(3)では、「移動物」、「移動先」が存在せず、「移動」とは考え難い。例 (2)の「磨く」は「～込む」と結合することによって、「磨く」という行為をしっかりとするという意味を表す。例 (3) では、「移動」より、V1「老ける」という激しい「状態」への変化を表すと考えられる。例 (4) の「見込む」、「申し込む」における前項動詞「見る」、「申す」と後項動詞「～込む」の意味関係が把握しにくく、2つの動詞の組み合わせより、ひとまとまりの1語として用いられていると考えられる。

以上からわかるように、後項動詞「～込む」は我々が思ったより複雑かつ豊かな意味を持つ。「V1+込む」における前項動詞と「～込む」はどんな意味関係を持つのか、また、「V1+込む」はどんなコンテキストの中で用いられるのかは興味深い課題である。

以下、第2節では従来の多義研究に用いられる理論的アプローチ(2.1)、および本稿と主に関連する先行研究を概観する(2.2)。第3節では、日本語複合動詞「V1+込む」の多義を扱う場合、多使用論的アプローチを援用すべき理由を述べる(3.1)。また、中国語を母語とする日本語学習者が作成した誤用例を分析し、「V1+込む」の使用条件を検討する(3.2)。

¹ 本稿で提示した例文は特に断りがない限り、すべては Web データに基づく複合動詞用例データベース(開発版)から収集したものである。なお、例文中の下線は筆者によるものである。

最後に4節にて結語および今後の課題を述べる。

2. 理論的枠組みおよび先行研究の概観

多義語の意味構造をどう扱うか、どのように多義語の意味を記述するのかに関しては、研究者によって異なる。2.1節では、多義研究に関する主な理論的アプローチ、「一括主義的アプローチ」、「細分主義的アプローチ」、「多使用論的アプローチ」について紹介しておきたい。2.2節では、日本語複合動詞の意味と結合制限に関する先行研究を概観する。

2.1. 多義研究に関する理論的アプローチ

2.1.1. 一括主義的アプローチと細分主義的アプローチ

従来の研究において、多義語の扱いは、細分主義と一括主義に大別できる。細分主義は語彙項目の各種の用法の細かな違いに注目し、語の指示対象が変わるごとに語義の数を増やしていく立場をとっている。それに対し、一括主義は語彙項目の各種用法の共通点を抽出し、抽象度の高い意味にまとめる。より具体的な用法は語用論的推論、コンテクスト的な要因から生じたものであると考えられている。

Lakoffは細分主義の立場をとる代表的な研究者である。Lakoff(1987)では、openという語彙項目の多義について考察している。Lakoff(1987)によれば、「ドアを開ける (open)」、「プレゼントを開ける (open)」において、「開ける (open)」が表す行動は異なり、2つの語義を持っていると主張している。一方で、一括主義的アプローチをとる Searle はこのような捉え方を認めず、openの直接目的語に現れる事物の性質によって、openは異なる意味になるという考えに従えば、openの意味が無節操に増えていくのではないかと指摘している(Searle 1983)。Searle(1983)によると、我々は「ドアを開ける (open)」という文を正しく理解できるのは、ドアというものの構造、使い方、目的に関して我々がよく知っており、また、ドアを開けるという行為が我々の日常生活の中で何度も繰り返し、慣習化されたためである。逆に、「山を開ける (open)」という表現が容認されないのは、その事柄は我々の慣習的行為として存在しないためである。従って、Searle (1983)は記憶の負担を最小限にするため、openという語の意味を1つにまとめ、具体的な解釈は「背景 (the Background)」²に基づく推論に任せばいいと主張している。

しかし、第二言語習得の立場から考えると、一括主義的アプローチもいくつかの問題がある。学習者にとって、すべての使用例から抽出した共通する単義の抽象度があまり高くなると、類義語との違いがわからなくなる可能性がある。また、言語共通の「背景」によって、うまく推論できる場合もあれば、言語によって同一物に対する認識が異なり、うまく推論できない場合もある。

² 世界の仕組み及び世界と我々の関わり方のことを指す (Taylor 2012 = 西村他編訳 2017: 342)。

2.1.2. 多使用論的アプローチとメンタル・コーパス

平沢 (2019) は英語の前置詞 *by* を考察対象とし、多くの研究者によって論じられてきた「多義論」の問題点を指摘し、新しく「多使用論」を提案した。平沢 (2019: 3) によると、現代英語母語話者が *by* を問題なく使用できるのは、従来の「多義論」に基づく構築された *by* の多義ネットワークの知識を知っているからではなく、「*by* をどのように使うと（たとえばどのような単語と一緒に使うと）どのような内容が伝達できるのかについての個別知識」を知っているからである。言い換えれば、ある語彙項目の「意味」を知っているとは、ある語彙項目の「使用・使い方」を知っていることなのだという主張である。平沢 (2019) は、このような語彙項目の「使用・使い方」を重視する理論的アプローチを「多使用論」と名付けた。また、「[TIME] までに」と対応づけられてきた *by* の時間用法 *by* [TIME] を多使用論に基づき、(5) のように記述している。

(5) a. *by* [TIME] とは：抽象的記述

by [TIME] は、時間軸を [TIME] よりも前から目で追っていき、[TIME] で目をとめ、そこでどのような状態が成り立っているかを語るための形式である。

b. *by* [TIME] の具体的特徴 1：時間軸を「目で追う」こと目的

[TIME] より前から始まった変化の結果状態を語ることが多いが、[TIME] よりも前に見られた状態が [TIME] においても依然として成り立っていることを語る場合もある。

c. *by* [TIME] の具体的特徴 2：修飾する動詞句の状態性

by [TIME] が修飾する動詞句は、原則として状態性動詞句を取る。[TIME] が未来である場合には、非状態性動詞句も認められるが、その場合でも [TIME] においてその動作の結果状態が成立していることが文意の焦点となる。

(平沢 2019: 61)

このような「使用」こそが「意味」なのだという考えは Taylor (2012) が提示したメンタル・コーパスという概念に基づくと考えられる。Taylor (2012) によると、我々が言語表現と接するたびに、その言語表現および言語表現が用いられる際のコンテキストが我々の記憶に残る。ある語彙項目をうまく用いられるか否かは、これまでに言語に接した経験によって決まるのである。これに基づき、Taylor (2012) は「語を記述するには、その語がどのような意味を表しどのような対象を指示できるかに加えてコンテキスト特性 (contextual profile) を明らかにしなければならない」と主張している (Taylor 2012 = 西村他編訳 2017: 333)。ここでのコンテキスト特性 (contextual profile) は具体的に以下のものを指す。

(6) (i) どのような語とコロケーションをなすか

(ii) どのような構文に現れるか

(iii)どのようなテキストに生じるか

(Taylor 2012 = 西村他編訳 2017: 333)

しかし、このような多使用論的アプローチに基づき、ある語彙項目の「使用・使い方」を記述する際に、具体的にどんな情報を含むべきか、また、どこまで記述するべきかは記述される語彙項目の特徴によって異なるだろう。

2.2. 日本語複合動詞の意味と結合制限に関する先行研究

日本語複合動詞の意味と結合制限に関する説明するには、これまで様々な扱い方がされてきた。項構造に基づき、日本語の語彙的複合動詞の組み合わせを説明する「他動性調和の原則」(影山 1993)、前項動詞と後項動詞の主語が同一物を指さなければならない「主語一致の原則」(松本 1998、由本 1996)、前項動詞と後項動詞の語彙概念構造 (LCS) の合成性による説明 (由本 2005)、背景知識を含むクオリア構造の合成性による説明 (由本 2013)、コンストラクションに基づく日本語複合動詞の構文的意味に関する分析 (野田 2011) などが挙げられる。ここでは本稿と主に関係あるフレーム意味論の観点から、複合動詞の意味制約を考察する陳・松本 (2018) について紹介しておきたい。

陳・松本 (2018) はコンストラクション形態論とフレーム意味論 2つの理論的枠組みを組み合わせ、フレーム・コンストラクション的なアプローチを用いることにより、日本語複合動詞の意味と体系分析を行なっている。日本語複合動詞の成立には以下の 2つの制約が存在すると主張している。

- ①日本語の複合動詞のスキーマには、特定の複合事象スキーマのテンプレートが存在し、このテンプレートに特定の動詞が合致することで、複合動詞が成立する。
- ②テンプレートに当てはめられた2つの動詞は、1つの整合性を保った「語彙的意味フレーム」を構成する必要がある。

(陳・松本 2018: 4)

陳・松本は①②をそれぞれ「コンストラクションの制約」、「語彙的意味フレームの制約」と名付けている。その中、特に、「語彙的意味フレーム」という概念を用い、複合動詞の結合制約や意味形成など様々な問題を説明できると主張している。

では、例 (7) を通し、意味フレームの役割を見ていきたい。

- (7) a. 試験で「論文形式で答えるように」という回答形式の部分を {読みおとして/??読みのがして} 簡条書きで答えてしまった。 (陳・松本 2018: 158)
- b. 電光掲示板に流れている文字を読み逃した。 (陳・松本 2018: 162)

例 (7a) の文脈では、「読みおとす」を「読みのがす」に書き換えると文全体が不適格になる。これは、表 1 が示すように、前項動詞「読む」と後項動詞「のがす」の意味フレームに何らかの不整合性が生じたからである。

V1V2 「??読みのがす」		
	V1 「読む」	V2 「のがす」
中心 事象	【認知主体】が【目】で【文字列】を【視線】で追うことで【情報】を受け取る	【捕獲者】が【対象】を捉えることに失敗する
事象 参与者	【認知主体】:【目】で【文字列】を【視線】で追うことで【情報】を受け取る人。 【情報】:【文字列】から【認知主体】が受け取る知識。 【目】:【認知主体】の身体部位の一つで、ものを見るための器官。 【文字列】:文字で構成された【情報】を含む試験用紙。 【視線】:【目】と見る対象を結ぶ線。	【捕獲者】:【対象】を捉えようとする意思的な主体。 【対象】:【捕獲者】が捉えたい逃げるもの。
関連 事象	前提的 (【文字列】は通常読み返せるため逃げない) : :	前提的 (【捕獲者】は【対象】を捉えようとしている； 【対象】は逃げようとしている；…) 結果 (逃げる【対象】が捕獲不可能な状態になる) : :

表 1：例 (7a) における不整合性 (陳・松本 2018: 163 (表 9))

一方で、例 (7b) のように、「読みのがす」がとる目的語を、一度読む機会を逃してしまうと二度と読めなくなる性質を持つ「電光掲示板に流れている文字」に書き換えると、文全体として容認されるようになる。つまり、不整合が生じた部分を整合性のある文脈要素で埋めることによって、容認度が上がるのである。

動詞の意味フレームにおける関連事象には、表 1 の前提的背景、結果に加え、原因、手段、理由、感情・感覚、様態、共起事象、付随音などが含まれる。しかし、これは固定化されておらず、認知主体の主観的判断によって後付的に設定しているのではないかと考える。これに関して、陳・松本 (2018: 156) は語彙的意味フレームの情報にはある程度の流動性があると答えている。つまり、関連事象の情報は人それぞれの言語経験の違いによってある程度個人差が存在し、その差によって、複合動詞に対する容認度が異なる場合がある。

ここでの「意味フレーム」は前述した「コンテキスト特性」と似たような性質を持っているのではないかと考える。多使用論的アプローチによる意味分析とフレーム意味論に基づく意味分析との違いが曖昧であるため、それぞれの特徴を明瞭化する必要がある。

3. 「V1+込む」の意味から「V1+込む」の使用条件へ

本節では、まず容認度が低い、また容認されない「V1+込む」の使用状況を見た上で、従来の捉え方ではなく、多使用論的アプローチに基づき、「V1+込む」の使用条件に注目すべき理由について述べる (3.1)。また、日本語学習者によって作成された誤用例を分析した上で、「V1+込む」の使用条件を解明するには何が不可欠であるのかを検討する (3.2、3.3)。

3.1. 「V1+込む」の使用条件に注目する理由

蘇 (2021) では、「V1+込む」の意味を以下のような3つのパターンに分けている。

- (8) パターン1：<ある領域の内部へ移動し、固着する>
(入れ込む、乗り込む、飲み込む、など)、
- パターン2：<V1 が表す行為を十分に行い、何らかの結果状態に達する>
(走り込む、磨き込む、使い込む、など)
- パターン3：<V1 が表す状態の程度が激しい・深い>
(黙り込む、話し込む、考え込む、など)

また、大量の実例を分析した結果、各パターンにくる前項動詞は以下のような特徴を持っていると主張している。

- (9) パターン1：「一回きりの動作性動詞」
- パターン2：「量的変化によって質的变化が起こりやすい動作性動詞または起こりにくい動作性動詞」
- パターン3：「未完了動詞に近い特徴を持つ安定した状態性動詞」

しかしながら、例 (10) のように、以上で提示された前項動詞の性質を満たしているものの、「～込む」との結合が容認されにくい項目の存在を無視してはいけない。

- (10) 吐き込む、炒め込む、教え込む、調べ込む、脱ぎ込む、迎え込む、抜き込む、揚げ込む、眺め込む、疑い込む、驚き込む、など

例 (10) のような Web データに基づく複合動詞用例データベース (開発版) に収録されておらず、一見容認されないような語彙項目の容認性を検証するために、蘇 (2021) は日本語母語話者 10 人に例 (10) のような語彙項目を 36 個提示し、容認性判断してもらった。その結果、36 個のうち、28 個は一部の回答者によって<場合によっては認められる>、<認められる>と判断された。

その中、「吐き込む」、「炒め込む」、「教え込む」は<場合によっては認められる>、<認

められる>と判断された語彙項目である。例 (11) ~ (13) のように、具体的な使用場面、使用文脈を補足することで、容認度が上がり、問題なく意味が通るもののように思われる。

(11) バケツの中に?吐き込んだ。

(12) それに、ニンニクを?炒め込みます。(「料理の途中である材料を炒めて入れる」意)

(13) 3人ほどパーティに参加するかどうか未定の人がいたが、とりあえず参加者の人数のうちに数え込んでおいた。

(母語話者による作例)

また、例 (14) ~ (16) のように、同じく「吐き込む」、「炒め込む」、「数え込む」であるが、どのようなコンテキストに使用されるかによってその意味解釈が異なってくる。蘇 (2021) の分類基準によれば、例 (11) ~ (13) はパターン1にあたる語彙項目であり、例 (14) ~ (16) はパターン2に属するものである。

(14) あの晩は飲みすぎて数時間トイレで?吐き込んだ。

(15) より香ばしさを出すために、これらの食材を?炒め込んでください。

(16) 息子は覚えるために1~100まで?数え込んでいる。

(母語話者による作例)

このように、「V1+込む」の意味は固定的で普遍的なものではないことがわかる。伝統的な意味観に基づき、個々の「V1+込む」それぞれの意味を規定するのが極めて難しいのである。同様に、前項動詞V1と「~込む」の結合が適格か不適格かは単に「V1+込む」のみを見て、機械的に線引きするのも妥当性に欠けると考えられる。それゆえ、「V1+込む」の使用実態を適切に把握するには、「V1+込む」の意味を羅列するのではなく、実際に使用される際に共起する文脈要素や、背景となる知識などの中で考え、「V1+込む」の「使用条件」に目を向けるべきだと考えられる。

3.2. 「V1+込む」の使用条件

先述したように、メンタル・コーパスの考えによると、ある語彙項目を使用できるか否かはそれまでの言語経験によって決まるのである。この点は第一言語獲得と第二言語習得に共通していると考えられる。しかし、母語話者と学習者それぞれが有する言語経験には大きな差異があることを看過することはできない。つまり、母語話者と比べ、学習者の場合、その語彙項目に接する機会、また使用頻度が比較的に少なく、限られた言語経験からカテゴリー化、スキーマ抽出、連想などが行われ、最終的に学習者の頭の中に定着した言語知識は不十分または誤っている場合がよくある。それゆえ、実際に使用する際に誤用が生じやすく、その語彙項目の意味を正確に把握しているとは言えない。

「V1+込む」の使用条件を検討するには、コーパスに収録されている適格な例文以外に、日本語学習者が作成した不適格な例文にも注目すべきだと考える。そこで、本稿は中国語を母語とする日本語学習者を対象とし、「V1+込む」に関するアンケート調査を行った。アンケート調査の回答者はすべて5年以上の日本語学習歴を持ち、日本在住経験がある。以下取り上げる誤用例はすべて(17)の2問の回答から収集した例文である。

(17) 問1: 普段ご自身が使用している「V1+込む」の語例およびそれを使った例文をできる限り多く書いてください。

問2: 「V1+込む」に対する把握状況³をご自身で判断した上で、例文を作成してください。(最低限1文)

まず、例(18)を見てみよう。例(18a)の使役移動事象は、動作主<蘇さん>、移動物<日本語>、移動先<中国人>が明示されており、文全体としては容認されにくいと考えられる。教える内容が普通の日本語である場合は、単純動詞「教える」で十分であり、あえて複合動詞「教え込む」を用いる必要がないと考えられる。それに対し、例(18b)のように、「教え込む」が取る目的語、つまり移動物<日本語>の前に「変な」という修飾語を付け加えると、文全体の容認度が上がると考えられる。

(18) a. ??最近、蘇さんはネットで中国人に<日本語>を教え込んでいます。

(学習者による作例)

b. 最近、蘇さんはネットで中国人に<変な日本語>を教え込んでいます。

(筆者による作例)

同様に、例(19a)では、動作主<担当の先生>、移動物<私>、移動先<オフィス>が明示されており、「呼び込む」の使用が不適格であると考えられる。Webデータに基づく複合動詞用例データベース(開発版)のデータから見ると、「呼び込む」がとる目的語は出現頻度が高い順に並べると、「客」、「人」、「運」、「幸運」、「幸せ」になる。その中、「客・人を呼び込む」という行為の目的として、良いサービスなどを提供することが一般的であると考えられる。また、「運・幸運・幸せを呼び込む」の場合、目的語自体が良いモノである。例(19a)の文脈では、担当の先生にオフィスに呼ばれるということは良いこととは考え難いため、不適格な文になる。一方で、例(19b)では、「お土産を配る」という良いことを前提として提示し、また、目的語を(19a)のような「私」1人ではなく、「同僚たち」という複数人に書

³ 問2では、25個の「V1+込む」を提示した。「V1+込む」に対する把握状況は習得状況と使用実態によって判断している。具体的に、習得状況と使用実態をそれぞれ、「①知らない、予測もできない；②知らないが、予測できる；③知っている」、「①全然使わない；②たまに使う；③よく使う」3段階に設定した。なお、習得状況と使用実態の組み合わせは①①である場合は、例文を作成する必要がない。

き換えると、文全体の容認度が上がるのである。

(19) a. ??私がぼうとしているところ、担当の先生にオフィスに呼び込まれてしまった。

(学習者による作例)

b. 担当の先生が出張のお土産を配ると言っておフィスに同僚たちを呼び込んだ。

(筆者による作例)

もちろん、「V1+込む」にくる前項動詞によって、必要となる文脈情報も異なるかもしれないが、以上の「教え込む」、「呼び込む」、2つの語例に関する分析から、複合動詞「V1+込む」の使用の容認性を高めるには、移動事象における移動物の性質、移動物の数、移動の目的に関する文脈情報の補足が必要であることがわかった。こういった文脈情報の補足が必要となる理由については、「V1+込む」の意味形成に含まれる広義の因果関係から説明できると考える。

陳・松本 (2018) は、V1 と V2 の意味関係に基づき、日本語の語彙的複合動詞を 13 種類⁴の意味タイプに分けている。また、これらの語彙的複合動詞においては、多くの場合、広義の因果関係が見られると主張している。ここでの広義の因果関係は原因型の複合動詞のような明らかな因果関係のほか、間接的な因果関係や目的性も含まれると説明している(陳・松本 2018: 100)。「V1+込む」も例外ではなく、広義の因果関係が関わっていると考えられる。つまり、V1 が表す事象が原因で、「～込む」が表す状態が結果になる。しかし、V1 が表す事象のみで「～込む」という結果を引き起こしにくい・引き起こさない場合がある。その場合、助力する文脈情報を補足することが必要であると考えられる。

4. 結語と今後の課題

本稿では、一括主義的アプローチ、細分主義的アプローチ、多使用論的アプローチについて概観した上で、「V1+込む」を正しく使用するためには、意味ではなく、使用条件を知っていることであると論じた。また、学習者による誤用例の容認度を上げるために必要となる文脈要素を確認し、「V1+込む」の使用条件について検討した。その結果、「V1+込む」の意味形成に広義の因果関係が含まれるため、移動物の性質、移動物の数、移動の目的など「～込む」という結果状態を引き起すための文脈情報が必要であることがわかった。

「V1+込む」が表す結果状態は文脈情報によって明示される場合もあれば、明示されない場合もある。明示されない場合、その結果状態が具体的に何を指すのかについて、前項にくる動詞の特徴、使用文脈、また背景知識などからさらに検討していく必要がある。また、

⁴ 13 種類の意味タイプは原因型 (溶け落ちる)、手段型 (叩き壊す)、前段階型 (割り入れる)、背景型 (見落とす)、様態型 (舞い落ちる)、付帯事象型 (泣き叫ぶ)、同一事象型 (抱き抱える)、事象対象型 (出し惜しむ)、比喩的様態型 (咲き狂う)、派生型 (打ち上げる)、V1 希薄型 (打ち震える)、V2 補助型 (騒ぎ立てる)、不透明型 (取り締まる) である (陳・松本 2018)。

本稿は紙幅の制限により、パターン 1 に属する「V1+込む」の使用条件のみを考察した。パターン 2、パターン 3 の「V1+込む」の使用条件については今後の課題としたい。

参考文献

- 影山太郎 (1993) 『文法と語形成』 東京: ひつじ書房.
- 蘇曉笛 (2021) 「日本語複合動詞「V1+込む」の多義構造と使用条件」—認知言語学の視点からの一考察」 修士論文, 大阪大学.
- 陳奕延・松本曜 (2018) 『日本語語彙的複合動詞の意味と体型—コンストラクション形態論とフレーム意味論』 東京: ひつじ書房.
- 野田大志 (2011) 「現代日本語における複合語の意味形成—構文理論によるアプローチ—」 名古屋大学大学院国際言語文化研究科博士学位論文.
- 姫野昌子 (1999) 『複合動詞の構造と意味用法』 東京: ひつじ書房.
- 平沢慎也 (2019) 『前置詞 by の意味を知っているとは何を知っていることなのか: 多義論から多使用論へ』 東京: くろしお出版.
- 松田文子 (2004) 『日本語複合動詞の習得研究—認知意味論による意味分析を通して』 東京: ひつじ書房.
- 松本曜 (1998) 「日本語の語彙的複合動詞における動詞の組み合わせ」 『言語研究』 114: 37-83.
- 由本陽子 (1996) 「語形成と語彙概念構造—日本語の「動詞+動詞」の複合語形成について—」 奥田博之教授退官記念論文集刊行会 (編) 『言語と文化の諸相』 105-118. 東京: 英宝社.
- 由本陽子 (2005) 『複合動詞・派生動詞の意味と統合—モジュール形態論から見た日英語の動詞形成—』 東京: ひつじ書房.
- 由本陽子 (2013) 「語彙的複合動詞の生産性と 2 つの動詞の意味関係」 影山太郎 (編) 『複合動詞研究の最前線—謎の解明に向けて—』: 109-142. 東京: ひつじ書房.
- Lakoff, George (1987) *Women, Fire and Dangerous Things: What Categories Reveal about the Mind*. Chicago: The University of Chicago Press. (池上嘉彦、河上誓作他訳 (1993) 『認知意味論—言語から見た人間の心』 紀伊国屋書店.)
- Searle, John. (1983) *Intentionality*. Cambridge: Cambridge University Press. (坂本百大訳 (1997) 『志向性: 心の哲学』 誠信書房.)
- Taylor, John R. (2012) *The Mental Corpus: How Language Is Represented in the Mind*. Oxford: Oxford University Press. ((西村義樹・平沢慎也・長谷川明香・大堀壽夫 (編訳) (2017) 『メンタル・コーパス—母語話者の頭には何があるのか—』 東京: くろしお出版.)

ウェブサイト

- 『現代日本語書き言葉均衡コーパス BCCWJ』 <https://shonagon.ninjal.ac.jp/search_form>
- Web データに基づく複合動詞用例データベース (開発版)
- <<https://csd.ninjal.ac.jp/comp/index.php>>

英語前置詞 at の〈場所〉義と〈時間〉義の意味的關係に関する考察

田尾 俊輔

1. はじめに

本稿では英語前置詞 at の意味のうち、〈場所〉義と〈時間〉義に注目し、両者の意味的關係性について議論する。従来の研究では、at が示す〈場所〉義と〈時間〉義に関して、例文(1)に見られる「場所の一点」が例文(2)に示される「時間軸上の一点」に写像されて意味が拡張したと分析されてきた。例えば、(1a)は *10 Victoria Street* を地図上で点として指し、(1b)は *the airport* を俯瞰して点として捉えていると考えることができる。一方で、(2a)は 1 日 24 時間のうち *10:00 a.m.* を点として表せ、(2b)は 1 ヶ月の暦のうち最後の日を点として見なせる。

- (1) a. They live at 10 Victoria Street.¹ (安藤 2012: 12)
b. He lost his wallet at the airport. (WEJD)
- (2) a. The ceremony will begin at 10:00 a.m. (WEJD)
b. She will have arrived in France at the end of June. (安藤 2012: 13)

また、〈場所〉義と〈時間〉義のどちらの意味も取り出せるように at に対して「特定」という一つの意味 (= 単義) が抽出・付与される場合などもあった。しかしながら、例文(3)のように at の意味を単なる「一点」と捉えるだけでは説明しづらい事例が存在する。(3)では、「パーティーの場で」「卒業式で」「学校 (の場) で」のように〈場所〉の読みだけではなく、「パーティーの時に」「卒業式の時に」「学校にいる時に」のように〈時間〉の読みも可能になる。

- (3) a. We met at a party. (安藤 2012: 12)
b. I hope to see you at the graduation. (WEJD)
c. Bill is no angel at school. (GEJD)

そこで本稿は例文(3)のような事例を〈場所〉義と〈時間〉義が混在するパターンとして分析し、at の〈場所〉義と〈時間〉義は意味的に完全に切り離されているわけではなく、連続していることを示す。

本稿の構成は以下の通りである。第 2 章では、at の〈場所〉義と〈時間〉義にまつわる先行研究を概観する。第 3 章では、〈場所〉義と〈時間〉義が混在する at の文例を分析・議論した後に、〈場所〉義と〈時間〉義の連続性について指摘する。第 4 章は本稿のまとめと今後の展望である。

¹ 本稿では、特に断りのない限り、提示した例文中の下線やイタリックは筆者が施したものである。

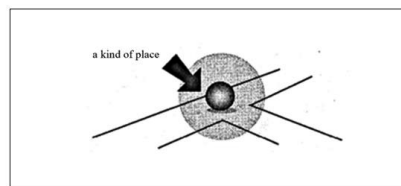
2. 先行研究概観

本章では at の〈場所〉義と〈時間〉義に関するこれまでの研究を概観する。とりわけ、〈場所〉義から〈時間〉義にメタファー的な意味拡張をしたと分析する研究 (= 2.1 節) や〈場所〉義と〈時間〉義に区分するというよりも抽象的な「特定」という意味を設定する研究 (= 2.2 節) を取り上げる。

2.1 〈場所〉義から〈時間〉義へのメタファー拡張

Quirk et al. (1985: 687) や木内 (2014: 220) には、〈場所〉を表す at の用法がメタファーとして〈時間〉を表す用法になったとの指摘がある。この指摘は英語学習用参考書の記載にもしばしば見られる。ここでメタファーとして意味が拡張するというのは、〈場所〉の領域において一点として取り上げられる位置が〈時間〉の領域において一点として取り上げられる位置と平行な関係にあるということである (詳細は Quirk et al. (1985) を参照)。言い換えると、〈場所〉の領域で表される位置関係が〈時間〉の領域にも写像されるということである。例えば、以下の例文(4)では *10 Victoria Street* を一点として見なし、例文(5)では *the end of June* を一点として見なししている。そもそも〈時間〉は私たちの目に見えるものではない。そこで知覚可能な〈場所〉で一点を指す方法と同じ方法を使うことで、〈時間〉の概念を捉えることができるようになっていくといえる。ここでの説明を図式化すると図1のようになる。

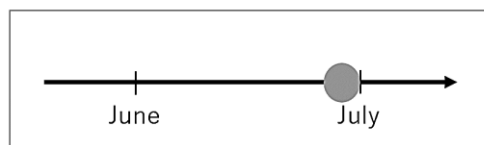
- (4) They live at 10 Victoria Street. (= (1a))
(5) She will have arrived in France at the end of June. (= (2b))



(田中・武田・川出(編) 2007: 80を参考に作成)

〈場所 (空間)〉

↓ 別の領域に写像



〈時間〉

図1: 〈場所〉義から〈時間〉義へのメタファー拡張

at の中心的な意味を〈場所〉の一点と設定する研究は多くある。そして、この中心の意味が at に含まれる他の意味も説明できると言及されることもある(瀬戸(編) 2007: 61)。例えば、木内(2014: 221)は例文(6)にある *at night* という表現は漠然とした広がりをもつ夜をその瞬間、瞬間に任意の時点として捉えていると述べている。²

(6) John always works late at night. (安藤 2012: 13)

しかしながら、上述のメタファーによる意味拡張の説明を適用する場合、そもそも〈場所〉と〈時間〉は互いに異なる領域であるという前提があるため、すでに示した例文(3)のような〈場所〉と〈時間〉が混在した事例をうまく説明することができないという問題点がある。

2.2 単義としての〈特定〉義の抽出

次に、「単義」とは文字通り「一つの意味」のことを指し、ある語における抽象度の高い意味を想定した後に、そこからその語が有するすべての意味を文脈の影響を受けた異形として引き出せると考える方法である(Ruhl 1989、Tyler and Evans 2003: 37、田尾 2021: 32)。例えば、加藤他(2015)は at の意味を下記(7)のように単義として設定すれば、他の at の意味も推測できるとする。

(7) [PP at NP] において、at は、「ある環境において指定されるべきものが NP である」という意味を持ち、かつそれ以上の語彙的意味を持たない。³

at の意味：〈特定〉

(加藤他 2015: 129)

次の例文(8)は〈場所〉における at の使い分けを示唆するものであるが、on は表面をもつものを要求し、in は中と外を区別する容器のような形を要求する一方で、at は形状についての条件はなく、場所を〈特定〉するだけだという(加藤他 2015: 129)。

(8) a. There are so many young people on the beach.

ビーチ (の表面上) には多くの若者がいた。

² 一方で、*in the night* だと夜を容器として捉えており、時間の流れが意識されるようになるということである(木内 2014: 221)。例文(i)にあるように、「夜→昼→夜」という変化が認識されるという。冒頭の *by next morning* という表現に注目されたい。

(i) *By next morning, however, the snow that had begun in the night had turned into a blizzard so thick that the last Herbology lesson of the term was canceled*

(J. K. Rowling, *Harry Potter and the Chamber of Secrets*; 木内 2014: 221)

³ ここでの PP は前置詞句 (Prepositional Phrase)、NP は名詞句 (Noun Phrase) を指す。

b. There are so many young people in the beach.

ビーチ（という空間の中）には多くの若者がいた。

c. There are so many young people at the beach.

ビーチ（という場所）には多くの若者がいた。（加藤他 2015: 129、訳文は筆者）

その他にも、以下の例文(9)では得意なことが英語だと〈特定〉されていると考えることができる(加藤他 2015: 131)。

(9) Mary is very good at English.

(安藤 2012: 12)

本稿での関心事である〈時間〉については、上記(7)の意味が時間という文脈に置かれて、とある時間を〈特定〉することになる。

(10) It starts at 9:30.

(加藤他 2015: 130)

本節での単義という考え方は、意味をシンプルに表せるという点では魅力的である。それゆえに英語学習という観点からは単義的なアプローチが採用されることも多い。しかし、at の例文を詳細に観察すると例文(3)のような〈場所〉と〈時間〉が混在した事例が見つかり、これに対しては意味解釈が分かれ得るため、実際のところ何を〈特定〉しているのかがわかりづらくなるという問題がある。

3. 〈場所〉義と〈時間〉義が混在する at

前章の先行研究では、at について〈場所〉義と〈時間〉義を分けて考えるメタファー的な意味拡張や〈特定〉のような単義的な意味を採用すると、〈場所〉義と〈時間〉義が混在する at の言語事例 (= (3)) を説明しづらくなるということを確認した。そこで本章では、〈場所〉義と〈時間〉義のどちらにも解釈できる at の例文を観察・分析することで、at の〈場所〉義と〈時間〉義には連続性があることを示す。

3.1 at の目的語は場所的表現だが〈時間〉義にも解釈できる場合

at に場所的表現が続くが〈時間〉の読みもできる事例としては、次の例文(11)がある。ここでは単なる場所だけではなく、その場所で起こっている出来事が想起されるのではないかと考えられる。例えば、例文(11a)ではパーティー会場では何らかの催しが開かれていることが想定でき、(11b)では卒業式会場では式典が開かれていることが予想される。また、(11c)では学校での生活や振る舞いが思い浮かぶ。そして、それぞれ「パーティーの時に会った」「卒業式の時に会う」「学校にいる時は悪ガキだ」と〈時間〉義で訳すことが可能である。

- (11) a. We met at a party. (= (3a))
 b. I hope to see you at the graduation. (= (3b))
 c. Bill is no angel at school. (= (3c))

さらに、例文(12)は空港で財布を無くしたという出来事が描写されている文であり、これについても「空港にいる時に財布を無くした」と〈時間〉義で訳せる。

- (12) He lost his wallet at the airport. (= (1b))

その一方で、その場所で起こっている出来事が想起されない場合には〈時間〉の読みはやや困難になる。例文(13)は「家にいる (家の) 時にいる」 (= 〈時間〉 義) にするとかなり冗長な訳となり、単に「家 (という場所) にいる」と〈場所〉義で訳せばよい。(14a)についても(13)と同様である。ただし、(14b)は *with some friends* という修飾語が付加されており、友だちと何かしていたことが想起されるため、「パーティーの時に友だちと一緒にいた」と〈時間〉義で訳しても自然になる。

- (13) I'll be at home all morning. (WEJD)
 (14) a. I was at a party. (作例)
 b. I was at a party with some friends. (瀬戸(編) 2007: 61)

このように、at に場所的表現が後続する場合であっても〈時間〉義として解釈可能なことがある。ここでは〈場所〉義と〈時間〉義が混在している中で〈時間〉義に焦点が当てられる場合であり、図2のようにまとめることができる。

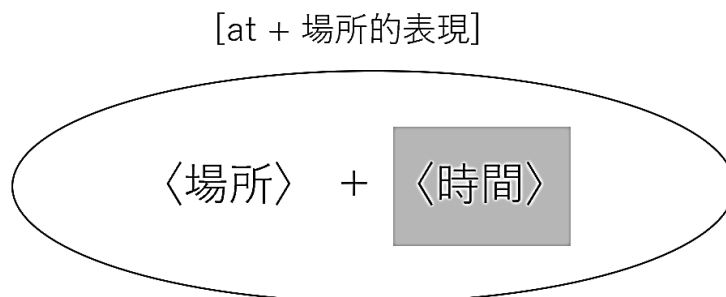


図2：〈時間〉義に焦点が当てられる場合

3.2 at の目的語は時間的表現だが〈場所〉義にも解釈できる場合

次に、at に時間的表現が続くが〈場所〉の読みも可能である事例としては、例文(15)が挙げられる。「平和」や「戦争」はその状態が時間的な広がりを持つ時に成り立つ概念である。その意味において、*peace* や *war* は時間的表現であるといえる。しかしながら、(15a)と(15b)はそれぞれ「世界は平和な場であった」「イングランド(軍)は戦争の場にいた」と〈場所〉義で訳すことが不可能ではない。

(15) a. The world was at peace.

b. England was at war with Hitler's Germany. (瀬戸(編) 2007: 62)

なぜ時間的表現が〈場所〉的に解釈可能になるのかについては、at が時間をどのように捉えているのかというところに関わっている。例えば、次の(16)は明らかな時間表現である。しかしながら、例文(17)のような一時点を表す at とはやや異質であり、(16)は時間的な幅があるにもかかわらず at を伴っている。この現象を説明する際によく用いられる考え方としては、「クリスマスの時期」あるいは「週末」を一つのまとまり (= 点) として捉え直しているというものである。ただし、そのような捉え直しが可能な理由が述べられることはほとんどない。

(16) a. at Christmas time

b. at (the) weekend(s) (WEJD)

(17) a. The ceremony will begin at 10:00 a.m. (= (2a))

b. She will have arrived in France at the end of June. (= (2b))

そこで、上記(16)のような表現が可能な理由として〈場所〉的信息も影響を与えているということを提案する。一つのまとまりとして捉えられるということは、まとめられるものは類似している、あるいは同質である必要がある。具体的には、*Christmas time* には特有の雰囲気や催しがあり、それが数日続くため、クリスマスの時期を同質のものとして捉えることができる。また *weekend(s)* は仕事をせずどこかで遊んだりのんびりしたりする時間が展開されており、その点で週末の日々は同質のものとして捉えることができる。したがって、*Christmas time* にも *weekend(s)* にも何らかの出来事があり、その出来事には〈場所〉的信息も含まれているといえる。このように考えると、例文(15)で〈場所〉義のように解釈可能な理由は、平和や戦争の時に特有の出来事が起こる場所が関係しているからだと説明することができる。

上記のように、at に時間的表現が後続する場合であっても〈場所〉義として解釈できる場合がある。これは〈場所〉義と〈時間〉義が混在している中で〈場所〉義に焦点が当てられる場合であり、図3としてまとめることができる。

[at + 時間的表現]

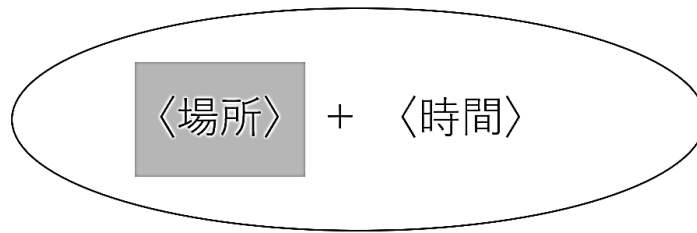


図 3 : 〈場所〉 義に焦点が当てられる場合

3.3 at の〈場所〉 義と 〈時間〉 義の連続性

上の 3.1 節および 3.2 節での議論から、at の〈場所〉 義と 〈時間〉 義は完全に切り離されるものではなく、実際のところは下記の(18)及び図 4 に示すように連続体を為しているのではないかと想定される。なお、(18b)と(18c)の部分が本稿で主に議論した〈場所〉 義と 〈時間〉 義が混在する at となる。

(18) a. 〈場所〉 義のみの解釈の場合

They live at 10 Victoria Street. (= (1a))

I was at a party. (= (14a))

b. 場所的表現が後続するが 〈時間〉 義にも解釈できる場合 (= 3.1 節)

We met at a party. (= (11a))

Bill is no angel at school. (= (11c))

He lost his wallet at the airport. (= (12))

I was at a party with some friends. (= (14b))

c. 時間的表現が後続するが 〈場所〉 義にも解釈できる場合 (= 3.2 節)

The world was at peace. (= (15a))

England was at war with Hitler's Germany. (= (15b))

d. 〈時間〉 義のみの解釈の場合

The ceremony will begin at 10:00 a.m. (= (2a))

She will have arrived in France at the end of June. (= (2b))

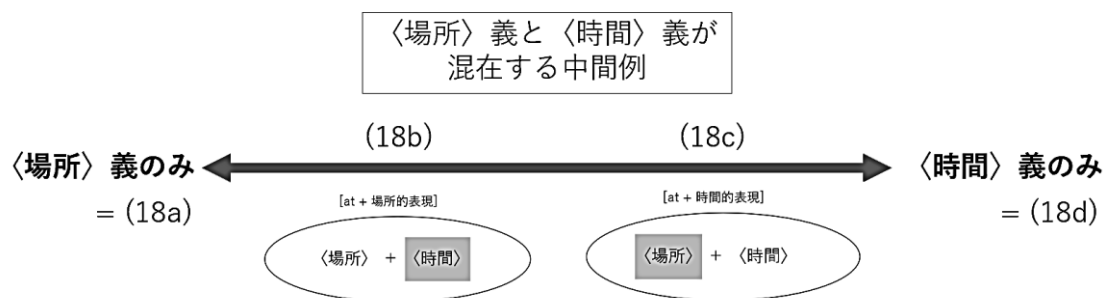


図4：(18)の図式化

上の(18)や図4に示されるように、atの〈場所〉義と〈時間〉義はきれいに切り分けられるものではなく段階性があるのだとすると、〈時間〉義(= (18d))は〈場所〉義(= (18a))からのメタファー的意味拡張であるという説明(= 2.1節)だけでは(18)全体を説明するのは難しくなる。⁴というのも、(18b)や(18c)のように隣接関係下で少しずつ意味がずれていく事例があり、ここにはメトニミー的意味拡張が関与している可能性があるからである。また、単義としての〈特定〉義を抽出する説明(= 2.2節)であっても、(18b)や(18c)の意味のずれを指摘するには細かな文脈を設定する必要があり、説明に相当の工夫が必要になることが予想される。

4. まとめと今後の課題

本稿では、英語前置詞atの意味のうち、特に〈場所〉義と〈時間〉義を取り上げて、両者の意味の関係性について議論した。従来の研究では、場所における一点が時間における一点に写像されるといったように、〈場所〉義から〈時間〉義へのメタファー的意味拡張が主張されることが多かった。また、atのあらゆる意味用法に当てはめることができる抽象的な意味を取り出そうとする動きも多い。しかしながら、本稿での議論から、〈場所〉義と〈時間〉義が混在する事例が存在し、意味的に少しずつずれながら連続体を為していることが明らかになった。これは、メタファー的な意味拡張を考えたり、抽象的な意味を取り出したりするだけでは説明しづらい事例である。

ただし、本稿では紙幅の関係上、十分な分量のデータを分析することができていない。例えば、(18a)-(18d)で示された各段階において、実際のところどのくらいの文例数があるのかという調査はできていない。これらの頻度情報を組み込むことで、atの〈場所〉義と〈時間〉義の関連性はより明らかになると思われる。

また、今回議論した事例がat自体の意味にすべて帰着させてよいのかということについても、別途検討を重ねていく必要がある。例えば、以下(19)に再掲した文では「学校

⁴そもそも「時空間(space-time)」ということばが存在することから、場所(空間)と時間は何らかの関係性があるということは想定できる。

(の場)で」とも「学校にいる時に」とも訳せるとすでに指摘したが、これらの意味は *school* によって喚起されているのではないかという疑問もある⁵。確かに *school* が「子どもたちが勉強や活動をする場所」といった背景知識があるからこそ、上記の〈場所〉義や〈時間〉義の解釈が可能だと判断できるともいえる。しかしながら、*school* という語単体では〈場所〉義と〈時間〉義の区別はできないため、前置詞 *at* も含めて検討を進める必要があると考えられる。

(19) Bill is no angel at school. (= (11c))

さらには、本稿で議論した *at* の〈場所〉義と〈時間〉義の意味的關係性は、*at* の意味が織り成すネットワーク全体ではどのような役割を果たしているのかというマクロな視点での分析も求められる。例文(20)をはじめとして、*at* は〈場所〉義 (= (20a)) と〈時間〉義 (= (20b)) 以外にも多様な意味を持つ。*at* の意味ネットワーク全体を意識しながら、個々の意味間の関連性を検討していくことも今後の課題として挙げられる。

- (20) a. Julie is at the post-office. 【場所】 (Herskovits 1986: 128)
b. She will have arrived in France at the end of June. 【時間】 (= (2b))
c. I bought these books at a dollar each. 【価格・速度等の目盛り】 (安藤 2012: 13)
d. John shot at the elephant. 【目標】 (岡本他 1998: 1)
e. I was surprised at the news. 【感情の原因】 (安藤 2012: 15)
f. Mary is very good at English. 【得意・不得意の対象】 (= (9))

以上に示した課題については、また別稿にて取り上げることにしたい。

参考文献

安藤貞雄 (2012) 『英語の前置詞』 東京: 開拓社。

Herskovits, Annette (1986) *Language and Spatial Cognition: An Interdisciplinary Study of the Prepositions in English*. Cambridge: Cambridge University Press.

加藤鉦三・花崎一夫・花崎美紀 (2015) 「At の意味論」『英文学研究支部統合号』 7: 127-135.

木内修 (2014) 「at の意味論的考察」『東洋大学大学院紀要』 51: 207-226.

岡本順治・佐々木勲人・中本武志・橋本修・鷺尾龍一 (1998) 「打撃・接触動詞の動能交替と結果の含意」『東西言語文化の類型論』: 173-192.

Quirk, Randolph, Sidney Greenbaum, Geoffrey Leech and Jan Svartvik (1985) *A Comprehensive Grammar of the English Language*. London: Longman.

⁵ これは由本陽子先生から指摘いただいたご助言である。ここに記して感謝申し上げる。

Ruhl, Charles (1989) *On Monosemy: A Study in Linguistic Semantics*. Albany: State University of New York Press.

瀬戸賢一 (編) (2007) 『英語多義ネットワーク辞典』 東京: 小学館.

田中茂範・武田修一・川出才紀 (編) (2007) 『エクスプレス E ゲイト英和辞典』 東京: ベネッセコーポレーション.

田尾俊輔 (2021) 「多使用論の建設的検討: 英語前置詞 at を例に」『認知・機能言語学研究』 6: 31-40.

Tyler, Andrea and Vyvyan Evans (2003) *The Semantics of English Prepositions: Spatial Scenes, Embodied Meaning and Cognition*. Cambridge: Cambridge University Press.

辞書

井上永幸・赤野一郎 (編) (2003) 『ウィズダム英和辞典: 第3版』 東京: 三省堂. (WEJD)

小西友七・南出康世 (編) (2001) 『ジーニアス英和大辞典』 東京: 大修館. (GEJD)

Language Creativity of Novel Instances: The Case of Perceptual Expressions for Tactile Sense *

ITAGAKI Hiromasa †

1. Introduction

In this squib, I will investigate creative extensions of [NP_{SUBJ} – V_{INTR} – ADJ_{COMP}] from a COGNITIVE CONSTRUCTION GRAMMAR perspective for language creativity. These instances for the creative extensions are represented in (1).¹

- (1) a. The mattress sleeps comfortable especially for side sleepers. (Itagaki 2021: 68)
b. The alternative would be silk, which wears warm. (Itagaki 2021: 61)
c. The hood fits sung under your helmet. (NOW Corpus: *Outside*)

The underlined phrases in (1) represent evaluations of the grammatical subject. The above sentences are idiosyncratic in that they express the logical object as the grammatical subject. The phrase in (1a), for instance, includes *the mattress*, which is normally construed as the instrument of sleeping, as the grammatical subject, and takes *comfortable* as an adjectival complement only after the verb *sleep*, although this verb is usually used with an agent (a sleeper) in the subject position.

Why are we able to use the sentences mentioned in (1) even though they seem to deviate from ordinary English grammar? Certainly, these idiosyncratic expressions are “grammatically incorrect” because they should co-occur with adverb adjuncts instead of the adjectival complement (e.g., *this mattress sleeps comfortably*, or *the hood fits snugly*). In addition, my informant reported that such adjectival complements should be avoided in public use. However, in current usage, these English expressions occur. They are understandable and even considered acceptable by most. Thus, this squib examines the motivations for sanctioning creative sentences such as (1).

Language creativity is one of the fundamental issues of linguistics. While some novel expressions can be accepted as imaginative or creative, other sentences merely sound awkward or unacceptable. For example, a sentence such as *this oven doesn't bake very well* is completely acceptable, while a similar sentence like *??this saucepan doesn't boil very well* would appear inappropriate.² A comprehensive explanation of the differences between these two sentences must be provided. In other words, a precise line should be drawn between flexibility and unacceptability in language expressions.

This study draws on a Cognitive Construction Grammar approach. The main idea is that speakers' language knowledge can be modelled as knowledge of constructions (Hilpert 2014: 22). Constructions

* This work was supported by JSPS KAKENHI Grant Number JP21K13027.

† Faculty of Management and Administration, Tokiwa University (itagaki@tokiwa.ac.jp)

¹ All underling was done by the author.

² These two interesting contrastive sentences are adapted from Taylor (1998: 174–175).

are defined as pairings of form and meaning that include not only idiosyncratic functions, but also morphological or phonological properties and the pragmatic or contextual dimensions in which a particular utterance is found (Goldberg 2006; Hilpert 2014). Constructionists thus argue that constructions are crucial to language description.

The Cognitive Construction Grammar approach, which is used by linguists to analyze expressions in terms of human cognitive apparatus such as perception, memory, abstraction, or attention, focuses on categorical networks between constructions, such as family resemblances or categorization among constructions (Goldberg 2006). A categorical network can account for the motivation of innovative expressions as an extension. This theory posits that language creativity and extensions can be divided based on constraints to the extent that an existing construction can partially sanction novel expressions based on similarity (Taylor 2002). Thus, in the Cognitive Construction Grammar approach, grammatical acceptability depends on the strength of the relationship between a conventionalized linguistic unit and a novel expression. If we cannot determine how to establish syntactic or functional similarity between one expression and a conventionalized construction, it is considered ill-formed. If an expression can be construed, fully or partially, as sanctioned by the construction, it is judged grammatical. Therefore, this approach may allow us to account for the motivation of the peripheral intransitive sentences in (1) with reference to well-established constructions.

I investigate the expressions in question, using evidence taken from corpus data and introspection. The corpora used for this study include web corpora as well as the Corpus of Contemporary American English (COCA). Since web data are not controlled for genre or grammatical acceptability, some of the collected data are likely to include awkward sentences. However, as Taylor (2012) reported, given the vast amount of language data on the Web, it is an invaluable source for the study of less frequent language items. As long as English native speakers judge the data to be acceptable within the given context, language items in web data can be valuable language evidence. Therefore, I will use the News on the Web Corpus (NOW corpus), which contains 14 billion words of data from web-based newspapers and magazines from 2010 to the present, and the iWeb corpus, which contains 14 billion words from 22 million web pages.

2. Observations

First, we discuss idiosyncratic expressions that involve the verb *sleep* with an adjectival complement, as in the underlined phrases in (2).

- (2) a. On the plus side, the bed sleeps cool and provides the just-right firmness to support you on your side or back. (Itagaki 2021: 66, NOW Corpus: *Nunatsiaq News*)
- b. The North Face's Beeline 900, which packs small and sleeps warm thanks to plenty of 900-fill-power down. (Itagaki 2021: 66, COCA, MAG)

- c. The mattress sleeps very cool and comfortable.(Itagaki 2021: 68, NOW Corpus: *Buzzfeed*)

In the expressions above, we can confirm that the verb *sleep* occurs with the adjective, which refers to temperature, such as *cool* or *warm*, or a sleeper's feeling like *comfortable*. Note that the adjectival complements appearing in (2) commonly designate not only the property of the subject complement but also the sleeper's feeling during sleep. Thus, sentence (2c) may be paraphrased as follows: *when we sleep on the mattress, it feels very cool and comfortable, which makes us cool and comfortable*.

Sentences similar to the *sleep* expressions can be observed in *wear* sentences, as exemplified in the following expressions (3).

- (3) a. They [i.e., = trousers] are most likely made of a fine Sea Island cotton, which is soft, lightweight and comfortable in the heat. The alternative would be silk, which wears warm and is avoided on hot summer nights. (Itagaki 2021: 61, iWeb)
- b. On my average size wrist, it wears great, comfortable and also looks like the right size. (iWeb)
- c. It [i.e., = the sweater] wears cooler than your standard wool or cashmere sweater, allowing it to work Spring through Fall. (Google³)

The grammatical subject in (3) corresponds to clothing or a personal ornament, which should be originally encoded in the grammatical object of the verb *wear*: *wearing a coat, hat, or watch*. This pattern also designates the features of the grammatical subject that put us in the state described by the adjectival complement.

Another example of the idiosyncratic expressions discussed in this study is given by the *fit* pattern. The grammatical subject in the underlined expressions in (4) stands for something that we put into our body, although these expressions may be less likely to describe the condition of wrapping our body than the above *sleep* or *wear* patterns.

- (4) a. The hood fits snug under your helmet, while a tall collar helps block drafts and rain from your face. (NOW Corpus: *Outside*)
- b. There's a neoprene sleeve that fits snug to your leg, helping the shin guard stay in place during more intense sessions. (NOW Corpus: *heavy.com*)
- c. They [i.e., = earbuds] are lightweight and fit comfortable in the ear without causing any sort of disturbance. (NOW Corpus: *Nasi Lemak Tec.*)
- d. It fits excellent with or without the feather bed under the pad. (NOW Corpus: *BuzzFeed*)

³ <https://propercloth.com/products/amalfi-beige-cotton-and-linen-sweater-446.html>

As represented in (4), the adjectival complement in the *fit* pattern designates our feeling when we put the grammatical subject on. Expressions of this sort can be confirmed with a different verb, as in (5).

- (5) Velcro straps in the sled keep the weighted bags in place, and the belt sits comfortable on your waist and attaches to the sled with a ring that is specifically constructed to allow for quick changes in direction. (NOW Corpus: *tmz.com*)

3. Analysis

Cognitive linguistics accounts for language creativity by means of our cognitive abilities, such as categorization or schematization, which enable us to create a novel usage by extending an existing construction. As mentioned in Section 1, novel expressions are licensed by a conventional construction to the extent that they bear formal or semantic similarities in the conventional construction (cf. analogical extension discussed in Goldberg 2019). An analysis via cognitive linguistics makes it possible to construe the copula-like intransitive expressions observed in the previous section as outcomes resulting from analogical extension of a well-established construction. This squib argues that these creative expressions are sanctioned by virtue of analogical extension from the conventionalized perceptual constructions that Taniguchi (1997) terms copulative perception verb constructions (CPV constructions), which are reviewed below.

3.1. CPV constructions

The CPV construction is exemplified in (6).

- (6) a. John looks happy. (Taniguchi 1997: 270)
b. This cake tastes good. (ibid.: 271)

The CPV constructions presented in (6) are generally composed of three elements: a noun phrase (NP), perception verb, and adjectival complement. They are of the popular type in nature: a copula sentence is a configuration that contains a functionally attenuated verb, followed by a complement denoting some property of the subject NP (Taniguchi 1997: 271). The characteristics of these constructions have been commonly reported in the literature. First, adjectival complements are obligatory for the CPV construction (Rogers 1974; Taniguchi 1997) as shown in (7).

- (7) a. * He looks. (Taniguchi 1997: 272)
b. * That sounds. (ibid.)

The second property of CPV constructions is that although they are not used in the passive voice, the

grammatical subject plays the role of a perceptual object, similar to a seemingly logical object, not a perceptual experiencer (Rogers 1974; Taniguchi 1997). *John* in (6a), for example, is not the visual experiencer but someone who is being visually experienced by others. Finally, CPV constructions connote an implicit experiencer, who can be marked by a prepositional phrase, as in (8). An implicit experiencer is interpreted as either the speaker (*to me*) or a generic individual (*to everyone*).

- (8) a. The cake tastes good to me. (Taniguchi 1997: 272)
b. John looks happy to everyone. (ibid.: 273)

3.2. Analogical extension from the CPV construction

This section points out that the copula-like intransitive expressions mentioned above share enough semantic and formal characters with the CPV constructions to realize the analogical extension of this construction.

First, the subject participants in the copula-like intransitive construction are semantically the objects in the verbal events. This construction profiles the property of the grammatical subject (that is, the instrument or theme), as opposed to backgrounding the agent of the action.

It is also observed that the copula-like intransitive construction in question requires an obligatory complement, similar to the CPV construction. This fact is confirmed by judging whether the element following the intransitive verb functions as a complement or an adjunct. As suggested by Bergs (2021: 148), complements usually add information on the quality of the grammatical subject, while adjuncts provide information on the action regarding time, space, reason, manner, or the like.⁴ The last section has shown that the elements in the copula-like intransitive construction designate the properties of the grammatical subject, and thus may function as a complement. Additionally, complements are obligatory, whereas adjuncts are always optional (Huddleston and Pullum 2002: 221). Therefore, the complement in a sentence like *Kim became ill* cannot be omitted without loss of grammaticality (**Kim became* by Huddleston and Pullum 2002: 261). The construction in question is quite similar to the CPV construction in the sense that it requires an obligatory adjectival complement because it would be less acceptable without the adjective, as in (9).

- (9) a. The mattress sleeps ??(warm).
b. The hood fits ??(comfortable).

⁴ Bergs (2021) goes on to explain a theoretical limitation of the clear-cut boundary between complements and adjuncts. For instance, the sentence *he stayed very quiet* illustrates a complement, while the sentence *he cried very loudly* has an adjunct. The contrast, however, leads to some confusion because the underlined phrases in both sentences semantically refer to properties of the subject. In fact, some scholars, including Bergs (2021), argue that the status of elements as complements and adjuncts is “a matter of degree” (see also Langacker 2003; Keizer 2004).

Moreover, the copula-like expressions as well as the CPV construction avoid the syntactic constraint in which subject-oriented depictives, which take an adjective as an adjunct, do not undertake *wh*-movement, as shown in sentences (10) to (12).

- | | | |
|---|---------------------------|-----------------|
| (10) How pretty does Betty look? | [CPV constructions] | (COCA, SPOK) |
| (11) How comfortable do the earbuds fit? | [copula-like expressions] | |
| (12) * How angry did John leave the room? | [depictives] | (Hoshi 1992: 2) |

Finally, the copula-like intransitive construction implies a conceptualizer who performs the verbal action. Itagaki (2021) argued that the *sleep* pattern is subjectively construed and implies the existence of the implicit conceptualizer, since the adjectival complements appearing in this pattern designate the sleeper's feeling as well as the subject referent. This can be represented as in (13).

(13) *Sleep* patterns as a construction:

SYNTAX: NP_{SUBJ} – *sleep* – ADJ_{COMP}

SEMANTICS: NP_{SUBJ} feels ADJ_{COMP} and makes someone (mainly, the conceptualizer) ADJ_{COMP} as s/he sleeps on it.

The semantic structure shown in (13) supports the argument that this pattern has been extended from the CPV construction. Many cognitive linguists have observed that the CPV construction is subjectively construed in that the implied experiencer, namely the conceptualizer, is strongly involved in the denoted situation even if s/he is not literally encoded (Taniguchi 1997; Whitt 2011). The *sleep* pattern shares functional characteristics with CPV constructions, such as the subjective status of construal, as well as the syntactic configuration [NP – V – ADJ]. In fact, we can find attested data like (14) and (15) showing that the patterns of *sleep* or *fit* can occur with the experiencer in a *to* prepositional phrase, as in the CPV construction in (8).

- | | |
|---|------------------------|
| (14) a. Everyone says it sleeps cool but <u>it slept warm to me</u> . | (Itagaki 2021: 69) |
| b. <u>This mattress sleeps cool to us</u> , [we] never woke up hot... | (ibid.) |
| (15) a. I have been looking for <u>a small shoulder bag that fits snug to me</u> that I could use when we walk around the parks ... | (Google ⁵) |
| b. <u>It fits snug to me</u> and rides comfortably wherever I choose to clip it. | (Google ⁶) |

Overall, the copula-like intransitive construction can be analyzed as an extension of the CPV

⁵ <http://abitofpixiedust11.blogspot.com/2011/07/walt-disney-world-anniversaries.html>

⁶ <https://www.severacustomleather.com/testimonials>

construction.

4. Motivation

So far, this paper has shown that copula-like novel expressions are instantiated as an extension of the CPV construction. Peripheral instances embodied through language creativity have found to be closely related to well-formedness, which can be accounted for on the basis of conventionality in cognitive linguistics (Evans 2019). Therefore, the well-established CPV construction sanctions new creative expressions with regard to the similarity of the function of the CPV construction.

Nevertheless, we cannot fully answer the question as to “why” the copula-like new expressions are produced even if the last section discussed “how” these sentences came into being. This section will account for the motivation for sanctioning these expressions on the basis of the CPV construction, by arguing that the expressions function as a compensation for the desire to depict a situation that cannot be accurately represented by the CPV (and in particular the *feel*) construction.

The CPV construction designates some evaluations as to the evocation or production of the sensation by the stimulus of the experience. Sensory verbs—*look*, *sound*, *smell*, *taste*, and *feel*—play a role in describing each sensory modality. Although the *feel* construction expresses a description of the tactile sense, this construction is noticeable because many examples that we come across of this construction in Web corpora refer to a physical sensation through touching by the hands, as in (16).

- (16) a. Her hair feels rough under my hand, so I smooth it down and smooth it down, until she closes her eyes and says, “June.” (COCA, FIC)
- b. Contemplating and rubbing the cooled gel between his fingers, Eskins noticed it felt smooth but not greasy. (COCA, ACAD)

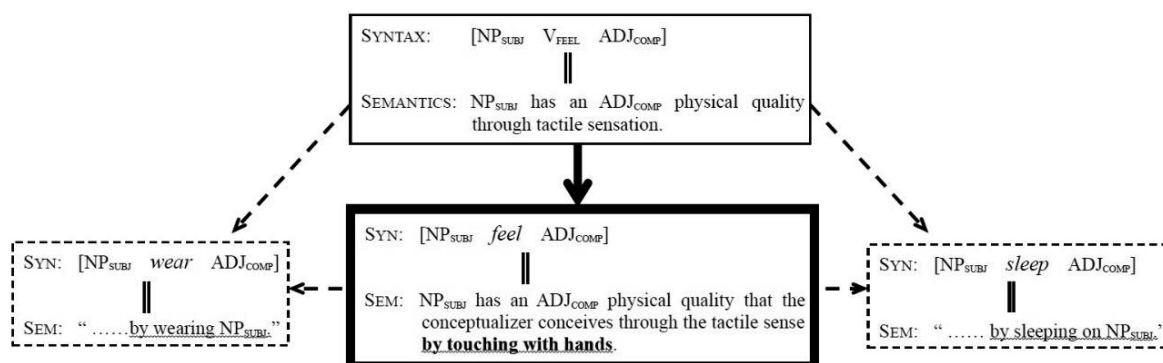
Furthermore, the descriptions of the verb *feel* in dictionaries imply the feeling of using our hands, as exemplified in (17) to (18), which suggests that the prototypical usage of the *feel* CPV construction depicts a sensory modality through touching.

- (17) To give you a particular physical feeling, especially when you touch or hold something.
Her hands felt rough. (Longman Dictionary of Contemporary English)
- (18) To have a particular physical quality which you become aware of by touching.
The water feels warm. (Oxford Advanced Learner’s Dictionary)

It is cognitively and linguistically plausible to divide tactile sense into the two aspects of “sensation by the hands” and “sensation by other body parts.” In cognitive science, it has been proposed that cognition is embodied, such that it depends on the experiences that result from

possessing a body with given physical characteristics and a particular sensorimotor system (Borghini 2005). Some researchers, such as Gibson (1962), claim that many properties of surfaces and objects can be registered by active touch, which is an exploratory process of touching something with our fingers. Colby and Goldberg (1999) explain that human beings can identify a spatial location not only by sight or sound, but also by reaching for it with either hand, as there are some neurons that fire more strongly when the target is moved within reaching distance. Linguistically, the language phenomena associated with “sensation by hands” have unique conceptual metaphors that are not reflected in “sensation by other body parts,” as shown in the conceptual metaphor UNDERSTANDING IS GRASPING (e.g., *I’m trying to grasp the meaning of this verdict, or I think I finally have a handle on the statistical principles* in Lakoff and Johnson 1980).

These previous discussions would support my argument that the *feel* CPV construction prototypically expresses the physical sensations in which we contact the subject NP referent by touching it with our hands, although it is not impossible for this construction to designate evaluations based on another tactile modality caused by contact with other body parts. This allows us to assume, in turn, that the tactile modality sourced by other body parts should alternatively be applied to and compensated with the representation of the copula-like intransitive expressions in question. Reconsideration of the examples presented in Section 2 reminds us of the characteristics of the expressions in which they describe the properties of the subject NP (as well as the conceptualizer’s evaluation) on the basis of tactile information obtained from body parts besides the hands. Cognitive linguistics posits that language creation results from the dynamicity of human communication, whereby speakers are able to innovate some expressions by means of extension from previously established constructions, even if the inventory of constructions available in a language is finite and cannot accurately depict certain situations in which speakers attempt to get across to listeners (cf. Tomasello 2008; Evans 2019). In this case, the use of copula-like intransitive expressions is motivated by a conflict in which the *feel* CPV construction cannot fully capture the particular situation. This constructional network can be described as follows.



This explanation is supported by the unacceptability of the *touch* expression. Taniguchi (1997) reports that the sentence in (19) is almost unacceptable in current English. My informant answered in the same way. Expressions of this sort are hardly seen in the corpora.

(19) *? This table touches hard.

(Taniguchi 1997: 295)

The unacceptability of *touch* expressions may be related to the statistical preemption process. Statistical preemption, as proposed by Goldberg (2016, 2019), is a type of indirect negative evidence that plays an important role in avoiding unacceptable sentences. According to Goldberg (2016: 377), when speakers recognize after repeated encounters that formulation B is the appropriate form in a given context, they implicitly learn that a semantically and pragmatically related alternative formulation A is not appropriate in this context. The situations observed in sentences such as (19) can be accounted for by statistical preemption. That is, because the verb *feel* is semantically and pragmatically quite similar to the verb *touch*, the well-established CPV construction may preempt the copulative use of *touch* as an alternative formulation, and as a result, these sentences are blocked by the CPV construction.

5. Concluding Remark

The Cognitive Construction Grammar approach for language creativity assumes that our cognitive apparatus allows us to create a new expression via an analogical extension from a well-established unit that speakers generalize over usage events. This squib has shown that copula-like novel expressions are indeed an analogical extension from the CPV construction; moreover, they are motivated by our desire to permit the expression of tactile sensations that the *feel* CPV construction cannot fully describe.

References

- Bergs, Alexander (2021) Complements and adjuncts. In Bas Aarts et al. (eds.) *The handbook of English linguistics (Second edition)*, 145-162, Hoboken: John Wiley & Sons Ltd.
- Borghini, Anna M. (2005) Object concepts and action. In Diane, Pecher et al. (eds.) *Grounding cognition: The role of perception and action in memory, language, and thinking*, 8-34, Cambridge: Cambridge University Press.
- Colby, Carol L. and Michael E. Goldberg (1999) Space and attention in parietal cortex. *Annual Review of Neuroscience* 22: 319-349.
- Evans, Vyvyan (2019) *Cognitive Linguistics: A complete guide (second edition)*. Edinburgh: Edinburgh University Press.
- Gibson, James J. (1962) Observations on active touch. *Psychological Review* 69(6): 477-491.

- Goldberg, Adele E. (2006) *Constructions at work: The nature of generalization in language*. Oxford: Oxford University Press.
- Goldberg, Adele E. (2016) Partial productivity of linguistic constructions: dynamic categorization and statistical preemption. *Language and Cognition* 8: 369-390.
- Goldberg, Adele E. (2019) *Explain me this: Creativity, competition, and the partial productivity of constructions*. Princeton: Princeton University Press.
- Hilpert, Martin (2014) *Construction grammar and its application to English*. Edinburgh: Edinburgh University Press.
- Hoshi, Hidehito (1992) Circumstantial predicates, pro, and D-structure adjunction. *English Linguistics* 9: 1-20.
- Huddleston, Rodney and Geoffrey K. Pullum (2002) *The Cambridge grammar of the English language*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Itagaki, Hiromasa (2021) On the extension of copulative perception verb constructions. *Joint project on language & culture 2020: Cognitive and functional linguistic studies* (Osaka University) 6: 61-70.
- Keizer, Evelien (2004) Postnominal PP complements and modifiers: A cognitive distinction. *English Language and Linguistics* 8: 323-350.
- Lakoff, George and Mark Johnson (1980) *Metaphors we live by*. Chicago/London: The University of Chicago Press.
- Langacker, Ronald W. (2003) Constructions in cognitive grammar. *English Linguistics* 20(1): 41-83.
- Rogers, Andy (1974) *Physical perception verbs in English: A study in lexical relatedness*. Doctoral dissertation, UCLA.
- Taniguchi, Kazumi (1997) On the semantics and development of copulative perception verbs in English: A cognitive perspective. *English Linguistics* 14: 270-299.
- Taylor, John R. (1998) Syntactic constructions as prototype categories. In Michael Tomasello (ed.) *The new psychology of language: Cognitive and functional approaches to language structure*, 162-186, New York/London: Psychology Press.
- Taylor, John R. (2002) *Cognitive grammar*. Oxford/New York: Oxford University Press.
- Taylor, John R. (2012) *The mental corpus: How language is represented in the mind*. Oxford: Oxford University Press.
- Tomasello, Michael (2008) *Origins of human communication*. Cambridge: The MIT Press.
- Whitt, Richard J. (2011) (Inter)subjectivity and evidential perception verbs in English and German. *Journal of Pragmatics* 43: 347-360.

**A Brief Note on *There* Contact Clauses:
With Special Focus on *There* Contact Clauses Selecting *Come* as the Second Verb***

MINO Takashi

1. Introduction

This study examines a special case of *there* constructions, called “*there* contact clauses,” in which two clauses are combined without relative pronouns, as in (1), although the omission of the subject relative pronoun is generally not allowed in present-day English, as in (2). For example, in (1a), the two clauses “there was a farmer” and “a farmer had a dog” are united without the relative pronoun *who*.

- (1) a. There was a farmer had a dog. (Lambrecht 1988: 319)
b. There’s a man lives in China. (Quirk et al. 1985: 1407)
c. There’s a man at the door wants to see you. (Curme 1931: 236)
- (2) a. * The table stands in the corner has a broken leg. (Quirk et al. 1985: 1250)
b. * I know a man lives in Canada. (ibid.: 1407)

Although this construction is ungrammatical, it is used (subconsciously) by native English speakers irrespective of geographical and social backgrounds (e.g., Lodge (1979), Lambrecht (1988), and Doherty (2000)). Because of its syntactic and semantic peculiarities, scholars have paid considerable attention to this construction, revealing its many distinctive aspects (e.g., Jespersen (1929), Lambrecht (1988), and Doherty (2000)). However, these studies have focused on overall features of *there* contact clauses without observing individual examples closely (a noticeable exception is a series of studies conducted by Yaguchi, such as Yaguchi (2017)).

In contrast, this study focuses on one type of *there* contact clause in which the verb *come* is used as a verb of the second clause, as in (3):

- (3) a. There was two guys came to see me at the restaurant where my wife worked at. (COCA: SPOK)
b. There’s nobody comes out she says. (BNC: spoken)

The goal of the study is to describe the syntactic and semantic features of such a clause to provide a useful perspective that helps future studies to elucidate these constructions.¹

* This work was funded by JSPS KAKENHI Grant Number 21K20003.

¹ This study does not attempt to refute previous studies. Further, it does not criticize previous studies by suggesting that they are insensitive to individual usages. Rather, it aims to supplement existing research.

This article is organized as follows: section 2 summarizes previous studies on *there* contact clauses to illustrate that these clauses are motivated by an informational structure requirement, and the verbs *come* and *go* are more often used than other verbs. Section 3 claims, based on the corpus study using *the British National Corpus* (BNC) and *the Corpus of Contemporary American English* (COCA), that the use of *there* contact clauses with the verb *come* is partially motivated by the occurrence of *to*-infinitives, particles, and short subject nouns (especially human nouns). Section 4 concludes this paper.

2. Previous Studies

This section presents semantic and pragmatic reasons why the “ungrammatical” construction, that is, the *there* contact clause, is appropriately used, with reference to previous studies such as Lambrecht (1988) and Hannay (1985). Next, on the basis of Yaguchi’s (2017) work, it is claimed that the motion verbs *come* and *go* are frequently used in such constructions.

Lambrecht (1988) proposes that the use of *there* contact clauses is motivated by the requirement of information structure: as English does not begin a sentence with new information, *there* contact clauses are chosen. By adding *there* to example (4a), it is possible to “establish a new discourse referent and to express a proposition about it in the same minimal sentential processing unit” (Lambrecht (1988: 333)).

- (4) a. A farmer had a dog.
b. There was a farmer had a dog.² (= (1a))

The expletive *there* and the semantically weak *be*-verb are selected because they do not convey anything more than the second clause “a farmer had a dog” in (4b). (See Jespersen (1927) and Doherty (2000) as well.) In fact, many studies such as Yaguchi (2017) propose that *there* contact clauses are observed most frequently when the contracted form *there’s* is chosen, as in (1b) and (1c).

Hannay (1985: 92) proposes a semantic difference resulting from the (un)occurrence of relative pronouns in *there* constructions: (5a) has an entity reading, while (5b) has a state-of-affairs reading. In other words, *there* contact clauses introduce an event rather than an entity. In fact, only *there* contact clauses such as (5b) can be appropriate in answer to a question such as *What happened?*

- (5) a. There was something hard that fell on the floor. (entity reading) (Hannay 1985: 92)
b. There was something hard fell on the floor. (state-of-affairs reading) (ibid.)

Yaguchi (2017) elaborates upon the discussion regarding *there* contact clauses with special focus

² There is no consensus of opinion on whether transitive sentences such as *A farmer had a dog* are informationally not preferred. See Breivik (1990) and Irwin (2020).

on which verbs are often used in second clauses. Before we jump into her findings, it is necessary to introduce her methodology. She primarily analyzes written data and distinguishes between (6a) and (6b): the former structure, *there + be + NP + pp*,³ is called “the TP construction,” while the latter structure, *there + be + NP + VP*, is called “the TV construction.”

- (6) a. There’s a parcel come. (TP construction) (Quirk et al. 1985: 1409)
 b. There’s a man lives in China. (TV construction) (=1b)

Yaguchi (2017) examines words that are mainly used as verbs in second clauses using *the Oxford English Dictionary* (OED), *the Corpus of Historical American English* (COHA), and COCA, revealing the frequent use of the verbs *come* and *go* in TP and TV. In the case of TP, *come* and *gone* account for 52.9% and 23.5% of data in OED, 70.4% and 17.0% in COHA, and 12.5% and 56.3% in COCA, respectively. In the case of TV, *came* accounts for 75% of the preterit verbal forms (*there was* and *there were*) in COHA, as shown in (7):

- (7) a. Well, there was a man came by who wanted me to help him head his cow back to the pasture. [1956, Kenneth Roberts *Boon Island*, COHA] (Yaguchi 2017: 125)
 b. There were some people came in here at noon after Arkansas. [1945, William Camp *Skip to my Lou*, COHA] (ibid.)

On the basis of these results, Yaguchi (2017: 125) concludes “*there + be + NP + come/go*⁴ in the TP construction is more or less a fixed unit, and *there + was/were + NP + came/went* is also a sentence unit to a considerable degree.”

This raises one question: why is the verb *come* often used in “abnormal” *there* constructions despite its felicitous use as the main verb in “normal” *there* constructions? The use of transitive verbs such as *have* in *there* contact clauses is understandable because such verbs are not allowed in normal *there* constructions, as in (8). In contrast, the restriction on verbs does not motivate the occurrence of the verb *come* in *there* contact clauses because the verb *come* can be freely used as a main verb in normal *there* constructions. In addition, the *there* sentence in (9) is capable of indicating a state-of-affairs reading and thus can be appropriate in answer to *What happened?* Also, the *there* sentence with *come* following the phrase “what happened next?” was attested in *the News on the Web* (NOW), as in (10).

- (8) * There had a dog a female farmer in the village. (constructed)

³ The word *pp* stands for past participle.

⁴ *Go* might be *gone*. See also Yaguchi (2017: 103).

- (9) A: What happened to the kingdom?
 B: Suddenly, there came to the castle a handsome knight who wanted to marry a princess.
 (constructed)
- (10) [S]o when the Blues acquired Snepsts along with Rich Sutter at the trade deadline from the Canucks in 1990, he (=Snepsts) was surprised by what happened next. # There came the chant. “Har-old! Har-old!” # “Holy geez,” he recalled of the first time he heard it. (NOW: US)

Thus, far more research is needed on why the verb *come* is frequently used in *there* contact clauses. The following section attempts to describe some syntactic and semantic features of the pattern to provide a useful perspective to assist future scholars to elucidate this construction.

3. Corpus Study of *There* Contact Clauses with the Verb *Come*

This research discusses the behaviors of *there* contact clauses with the verb *come* in an attempt to answer the following two questions: (i) What types of nouns are selected as the subject of the main clause? and (ii) What kind of elements are used after the verb *come* in the second clause? These questions are tackled in section 3.1 and 3.2, respectively.

Three caveats are in order regarding our data. First, this study is thoroughly usage-based by focusing on actual examples occurring in COCA and BNC, but it is extremely difficult to judge whether the sentences attested in corpora are actually accurate and well-formed because of their anomalous nature. Second, this study counts the frequency of particular examples, but because of the small number of attested examples in corpora, it is impossible to present statistical results. Third, although this study strongly agrees with Yaguchi’s (and Quirk et al.’s (1985)) classification of *there* constructions (the TP construction vs. the TV construction), it, expediently, lumps them together to understand the overall features of *there* constructions with *come*, because this study seeks to determine why the verb *come* follows, not precedes, subject nouns in *there* constructions.⁵

3.1. Frequently Used Subject Nouns

The preferred subject nouns of *there* contact clauses are rather different from those of normal *there* constructions. This subsection investigates subject noun phrases with respect to their length and types. *There* contact clauses are collected by using the search formulas of online COCA and BNC listed in Table 1. As a result, 106 and 68 *there* contact clauses were retrieved from COCA and BNC, respectively.⁶

⁵ Only the TV construction corresponds to *there* contact clauses in many previous studies. Thus, my classification might cause some confusion.

⁶ This study excludes examples in which commas are inserted between *be*-verbs and subject nouns or subject nouns and the verb *come*, as in (i) and (ii):

there's * come	there is * come	there was * come	there are * come	there were * come	there're * come
there's ** come	there is ** come	there was ** come	there are ** come	there were ** come	there're ** come
there's *** come	there is *** come	there was *** come	there are *** come	there were *** come	there're *** come
there's * comes	there is * comes	there was * comes	there are * comes	there were * comes	there're * comes
there's ** comes	there is ** comes	there was ** comes	there are ** comes	there were ** comes	there're ** comes
there's *** comes	there is *** comes	there was *** comes	there are *** comes	there were *** comes	there're *** comes
there's * came	there is * came	there was * came	there are * came	there were * came	there're * came
there's ** came	there is ** came	there was ** came	there are ** came	there were ** came	there're ** came
there's *** came	there is *** came	there was *** came	there are *** came	there were *** came	there're *** came

Table 1. The search formulas (noun types)

Interestingly, many of the subject nouns are categorized as human nouns, as listed in (11); two examples are quoted from COCA and BNC in (12):

- (11) a. a gentleman (3), somebody (3), nobody (2), people (2), someone (2), a casting director, a counselor, a farmer, a fellow, a geezer, a girl, a Japanese destroyer, a little baby, a man, a new boarder, a noisy neighbor, a nurse, a wizard, a woman, Americans, an Indian, an officer, five murderers, Jerry Hall, learned man, many people, no one, no other, no shadowy figure, some, some Italians, some unknown man, Spanish, staff sergeant, such a one, the man, this couple, two guys, two Republican senators, 150000 people (47 nouns [44.34%]) (COCA)
- b. another lot (3), somebody (3), a company (2), a gentleman (2), a lady (2), people (2), a champion strong-man, a Chris, a dentist, a fella, a fellow, a few, a lot, a man, a new man, a Norwegian, a party, an old man, another one, many tourists, Michelle, Molly, no one, nobody, one child, six black doctors, so many people, some, the mass producer, this bloke, this old lady, two guys, two little boys (41 nouns [60.29%]) (BNC)
- (12) a. There was **a nosy neighbor** came by that said that the deceased bought the gun a few months back for protection from her estranged husband. (COCA: TV)
- b. There was **this old lady** comes towards me; she was fussing about her luggage, that a porter was pushing behind her on a trolley. (BNC: spoken)

Some readers might think that the frequent use of human nouns is not worth mentioning, but this usage

-
- (i) Finally, you know-there's, this documentary came out in France this week, which is really incredible. (COCA)
- (ii) There's this guy, comes in here every May 1st. Every May 1st, every December 1st. Like clockwork. (COCA)

is a rather distinctive feature of *there* contact clauses when one considers the distributional behaviors of other *there* constructions: normal *there* constructions with *be*-verbs and *come*. For example, Sasaki (1991) and Pfenninger (2009) have claimed on the basis of quantitative surveys that abstract nouns tend to be used in *there* constructions with *be*-verbs. In addition, the author's previous research (e.g., Mino (2020)) revealed that approximately 95% of the subject nouns of *there* constructions with *come* are abstract nouns such as *time* or *sound* in COCA and BNC. Thus, the frequent use of human nouns is a remarkable feature of *there* contact clauses, which potentially motivates the use of the construction.

Next, this subsection analyzes the length of subject nouns of *there* contact clauses. In this case, examples are collected from BNC by using the search formulas listed in Table 2. As a result, 66 *there* contact clauses were attested in BNC.

there {be/V} _{ART}? ((_{ADV})? _{A})* _{N} _{PREP} _{ART}? ((_{ADV})? _{A})* _{N}? _{V}? come
there {be/V} _{ART}? ((_{ADV})? _{A})* _{N} _{PREP} _{ART}? ((_{ADV})? _{A})* _{N}? comes
there {be/V} _{ART}? ((_{ADV})? _{A})* _{N} _{PREP} _{ART}? ((_{ADV})? _{A})* _{N}? came
there {be/V} _{ART}? ((_{ADV})? _{A})* _{PRON} _{PREP} _{ART}? ((_{ADV})? _{A})* _{N}? _{V}? come
there {be/V} _{ART}? ((_{ADV})? _{A})* _{PRON} _{PREP} _{ART}? ((_{ADV})? _{A})* _{N}? comes
there {be/V} _{ART}? ((_{ADV})? _{A})* _{PRON} _{PREP} _{ART}? ((_{ADV})? _{A})* _{N}? came
there {be/V} _{ADV} _{ART}? ((_{ADV})? _{A})* _{N} _{PREP} _{ART}? ((_{ADV})? _{A})* _{N}? _{V}? come
there {be/V} _{ADV} _{ART}? ((_{ADV})? _{A})* _{N} _{PREP} _{ART}? ((_{ADV})? _{A})* _{N}? comes
there {be/V} _{ADV} _{ART}? ((_{ADV})? _{A})* _{N} _{PREP} _{ART}? ((_{ADV})? _{A})* _{N}? came
there {be/V} _{ADV} _{ART}? ((_{ADV})? _{A})* _{PRON} _{PREP} _{ART}? ((_{ADV})? _{A})* _{N}? _{V}? come
there {be/V} _{ADV} _{ART}? ((_{ADV})? _{A})* _{PRON} _{PREP} _{ART}? ((_{ADV})? _{A})* _{N}? comes
there {be/V} _{ADV} _{ART}? ((_{ADV})? _{A})* _{PRON} _{PREP} _{ART}? ((_{ADV})? _{A})* _{N}? came
there {be/V} _{ART}? ((_{ADV})? _{A})* _{N} _{PREP} _{ART}? ((_{ADV})? _{A})* _{N}? _{ADV} come
there {be/V} _{ART}? ((_{ADV})? _{A})* _{N} _{PREP} _{ART}? ((_{ADV})? _{A})* _{N}? _{ADV} comes
there {be/V} _{ART}? ((_{ADV})? _{A})* _{N} _{PREP} _{ART}? ((_{ADV})? _{A})* _{N}? _{ADV} came
there {be/V} _{ART}? ((_{ADV})? _{A})* _{PRON} _{PREP} _{ART}? ((_{ADV})? _{A})* _{N}? _{ADV} come
there {be/V} _{ART}? ((_{ADV})? _{A})* _{PRON} _{PREP} _{ART}? ((_{ADV})? _{A})* _{N}? _{ADV} comes
there {be/V} _{ART}? ((_{ADV})? _{A})* _{PRON} _{PREP} _{ART}? ((_{ADV})? _{A})* _{N}? _{ADV} came
there {be/V} _{ART}? ((_{ADV})? _{A})* _{N} _{PREP} _{ART}? ((_{ADV})? _{A})* _{N}? _{ADV} _{V} come
there {be/V} _{ART}? ((_{ADV})? _{A})* _{PRON} _{PREP} _{ART}? ((_{ADV})? _{A})* _{N}? _{ADV} _{V} come

Table 2. The search formulas (word length)

The examination of data revealed that most subject nouns are much shorter, and the majority of them consist of two words. The ratio of each word length is summarized in Table 3, and each actual

example from each length is presented in (13).

length of subject nouns	Total (66 examples)
one word	11 (16.67%)
two words	36 (54.55%)
three words	12 (18.18%)
four words	6 (9.09%)
more than four words	1 (1.52%)

Table 3. Length of subject nouns (BNC)

- (13) a. There's **nobody** comes out she says. (BNC: spoken)
 b. There's **a gentleman** come. (BNC: written)
 c. Yeah I know they come er there's **a big lorry** comes and collects them. (BNC: spoken)
 d. That was the time when there was **a first portable radios** come out. (BNC: spoken)
 e. There's **a man with a Doberman** comes around two or three times every night. (BNC: written)

This result is compatible with Yaguchi's (2017: 90) finding that "almost all the NPs in the OED's TV tokens after 1700 consisted of fewer than six words."

This study assumes that the short length of subject nouns potentially motivates the use of *there* contact clauses because normal *there* constructions with non-*be* verbs are often motivated by a stylistic perspective: to locate a considerably longer component of the subject within the final position of the sentence for easy processing. The *there* should be used in (14a) because the canonical word order in (14b) is awkward when the two grammatical elements, the subject and the verb, are so far apart:

- (14) a. There exist unicorns that are white in the winter, green in the spring, grey in the summer and black in the autumn. (Breivik 1990: 158)
 b. Unicorns that are white in the winter, green in the spring, grey in the summer and black in the autumn exist. (constructed)

On the basis of such discussion, it can be assumed that the short length of subject nouns prevents some speakers from using normal *there* constructions with *come*. Thus, abnormal *there* contact clauses are selected instead.

3.2. Elements Following *Come* (*To*-infinitive and Particles)

This subsection claims that the use of *to*-infinitive and particles with *come* potentially motivates the use of *there* contact clauses. First, let me focus on *there* contact clauses with *to*-infinitives. In corpora, *there* contact clauses followed by *to*-infinitives functioning as purpose adjuncts are relatively often attested as in (15), where the verb *see* appears most frequently:⁷

- (15) a. It, well, it ought, see there were so many people come **to see it**, but there was thousands you know, at different times like, you know. (BNC: spoken)
- b. There was this bloke came **to see me**. (BNC: written)
- c. Aye er the [unclear] when I was [unclear] I got better and [unclear] I got down to [unclear] and there was a fella come **to look and see me**. (BNC: spoken)
- d. There's an officer come **to escort you** to the police station. (COCA: MOV)
- e. There's actually somebody come from the Fed **to make sure** we hand them back, \$100 bills. (COCA: SPOK)

However, such *to*-infinitives are avoided in normal *there* constructions with *come*. In BNC, only the *there* sentences in (16) are followed by *to*-infinitives (purpose adjuncts) among all the *there* sentences (*there comes/there come/there came*).⁸ Thus, the occurrence of *to*-infinitives is considered to be one factor motivating the use of *there* contact clauses.

- (16) But then there came 'new' comedy **to blow away the medieval cobwebs**; and then there came Russell Davies **to make documentaries about it**, with titles like *There's A Racial Stereotype In My Soup* (Radio 4 Saturday). (BNC)

Second, the occurrence of particles potentially motivates the use of *there* contact clauses as well. My impression is that the particles *out* and *up* are comparatively frequently attested in the corpora.⁹

¹⁰ Examples are as follows:

- (17) a. There are good things have come **out** if as well like (BNC: spoken)
- b. That was the time when there was a first portable radios come **out** (BNC: spoken)

⁷ The raw frequency of such expressions is not high because of the small number of *there* contact clauses.

⁸ There are two reasons for this infrequency. First, the number of human nouns is extremely low in *there* constructions with *come*. Second, purpose clauses are not easily compatible with *there* constructions because the construction cannot express the volitional action performed by subject nouns. See Lumsden (1988) for further details.

⁹ Again, the raw frequency of such expressions is not high because of the small number of *there* contact clauses.

¹⁰ Examples with other particles are as follows:

- (i) Now there's this couple came **by**, and... - Yeah. Yeah. - they didn't know you were open. (COCA: MOV)
- (ii) As a matter of fact, we just want to let people know, Matthew, as you were reporting, there was a plane came **in** over your shoulder and landed. (COCA: SPOK)
- (iii) There was a cab came **along**, dropped a guy in front of the place. (COCA: FIC)

- c. There's a little baby comes **out** and there's the little baby and then you start to grow up. (COCA: SPOK)
- d. But I think the question is, some kinds of anger are unconcealed and they stay suppressed forever, like Nixon's, where there's resentments would come **out**. (COCA: SPOK)
- (18) a. There's a very interesting issue has just come **up** actually 'cause we're having this fashion show. (BNC: written)
- b. And the books of, are useful because there are lots of new ideas have come **up**. (BNC: spoken)
- c. Oh and you can hold [pause] i-- i-- if there's one comes **up** you can hold it. (BNC: spoken)
- d. There was one child came **up** about seventeen times (BNC: spoken)

However, such particles tend to be avoided in normal *there* constructions with *come*. In BNC, only the following two *there* sentences are attested when searching for the configurations *there* {*come/comes/came*} *out* and *there* {*come/comes/came*} *up*. Thus, the occurrence of particles is considered to be a factor motivating the use of *there* contact clauses.

- (19) a. As they did so there came **out** of the mist a car and it must have seen the crows at me for it stopped. (BNC)
- b. [A]nd there came **up** from the depth of his heart such petitions for men as I had never heard be-fore. (BNC)

In conclusion, what is common to these two patterns is that they make verb phrases heavier and longer. In other words, *there* contact clauses are motivated with respect to informational structure.

4. Conclusion

This study focuses on *there* contact clauses in which the verb *come* is used as a verb of the second clause. It reveals that the use of particles and *to*-infinitives potentially motivates the use of *there* contact clauses. In addition, the subject nouns play an important role in the use of *there* contact clauses: shorter nouns, especially human nouns, are often selected as the subject of *there* contact clauses. What these findings have in common is that they make VPs longer but subject NPs shorter. Thus, the information structure might have an influence on the use of *there* contact clauses. This author hopes that these findings will assist future scholars to elucidate these constructions.¹¹

¹¹ The frequent use of the verb *go* might be caused by another factor: the existence of one frequently used pattern, as in (i) and (ii).

References

- Breivik, Leiv E. (1990) *Existential there: A synchronic and diachronic study (2nd ed.)*. Oslo: Novus Press.
- Curme, George O. (1931) *Syntax (A grammar of the English language, Vol 3)*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Doherty, Cathal (2000) *Clauses without 'that': The case for bare sentential complementation in English*. New York: Garland.
- Hannay, Michael (1985) *English existentials in functional grammar*. Berlin: Mouton de Gruyter.
- Irwin, Patricia (2020) Unaccusativity and theticity. In Werner Abraham, Elisabeth Leiss, and Yasuhiro Fujinawa (eds.) *Thetics and categoricals*, 199-202. Amsterdam: John Benjamins.
- Jespersen, Otto (1927) *A modern English grammar on historical principles*. London: George Allen Unwin.
- Lambrecht, Knud (1988) There was a farmer had a dog: Syntactic amalgams revisited. *BLS* 13: 319-339.
- Lodge, Ken R. (1979) A three-dimensional analysis of non-standard English. *Journal of Pragmatics* 3: 169-195.
- Lumsden, Michael (1988) *Existential sentences: Their structure and meaning*. London: Croom Helm.
- Mino, Takashi (2020) A constructional analysis of *there* sentences with non-*be* verbs. Unpublished doctoral dissertation, Osaka University.
- Pfenninger, Simone E. (2009) *Grammaticalization paths of English and high German existential constructions: A corpus-based study*. Bern: Peter Lang.
- Quirk, Randolph, Sydney Greenbaum, Geoffrey Leech and Jan Svartvik (1985) *A comprehensive grammar of the English language*. London/New York: Longman.
- Sasaki, Miyuki (1991) An analysis of sentences with nonreferential *there* in spoken American English. *Word* 42: 157-178.
- Yaguchi, Michiko (2017) *Existential sentences from the diachronic and synchronic perspectives: A descriptive approach*. Tokyo: Kaitakusha.

Data Sources (Corpora)

The British National Corpus (BNC)

The Corpus of Contemporary American English (COCA)

The NOW corpus (NOW)

-
- (i) There's not a day goes by that I don't think of her.
(ii) There isn't a day goes by I don't think about my daughter.

(COCA: MOV)
(COCA: TV)

***Mottainai* as a Japanese Cultural Keyword**
- A Key Semantic Difference to the English Word *Waste* -

SAKABA Hiromichi

1. Introduction

The purpose of this study is to unpack the meaning of the Japanese term *mottainai*, one of the culturally important concepts in Japan. *Mottainai* is an adjective commonly used in daily life and often used to encourage children not to leave a single grain of rice in their bowls. It has also attracted attention outside of Japan. Wangari Maathai, a Kenyan environmentalist who won the 2004 Nobel Peace Prize, introduced the concept *mottainai* as a slogan to promote environmental protection at a session of the United Nations. This term, she believes, perfectly encapsulates the spirit of the 3Rs (reduce, reuse, recycle). It is noteworthy that she used the Japanese term *mottainai* without translating it into English.

Is there any English concept equivalent to the concept of *mottainai*? Referring to the Japanese-English dictionaries at hand, let us see how *mottainai* is commonly translated into English. In the following examples, “to let the water run like that” in (1) and “to drop the ice cream” in (2) are described as *mottainai*. Both of them are translated into English as *waste* in the Japanese-English dictionaries.

- (1) Mizu-wo sonnani nagashite-wa *mottainai*.

water-ACC like that let run-TOP waste

‘What a waste to let the water run like that!’

(Shogakukan PROGRESSIVE Japanese-English Dictionary)

- (2) “Katta bakari-no aisukuriimu-wo jimen-ni otoshichatta.” “Aa, *mottainai*.”

bought just-GEN ice cream-ACC ground on dropped oh waste

“The ice cream I had just bought fell on the ground.” “Oh, what a waste.”

(O-LEX Japanese-English Dictionary)

The original sentence and the English translation above appear to express similar meanings. However, if the meaning conveyed by the term *mottainai* is precisely the same as that of *waste*, there would be no need to import the term *mottainai* as a global slogan for environmental protection.

This study aims to clarify the meaning of the Japanese concept *mottainai*, especially by comparing it with the meaning of the English word *waste*. It will be shown that the difference in meaning between them is the motivation behind the adoption of *mottainai* in environmental protection campaigns, as well as another extended use of *mottainai* that is not normally translated as *waste*.

2. Previous Studies

Section 2.1 reviews previous studies on the relationship between the concept *mottainai* and environmental protection. Introducing the concept of cultural keywords, 2.2 argues that *mottainai* can be regarded as one of the Japanese cultural keywords. 2.3 gives an overview of the Natural Semantic Metalanguage (NSM) approach, which makes it possible to define the meaning of such culture-specific concepts in a way that can be understood by cultural outsiders.

2.1. *Mottainai* as a Global Slogan for Environmental Protection

As briefly mentioned, Wangari Maathai was attempting to spread the Japanese term *mottainai* as a slogan for environmental protection without deliberately translating it into English.

- (3) On a visit to Japan, Dr. Maathai was deeply impressed by the expression *mottainai*, and became determined to publicize it to the world. At the United Nations session, Dr. Maathai, brandishing a t-shirt emblazoned with the term MOTTAINAI, explained that the meaning of the term *mottainai* encompasses the four Rs of reduce, reuse, recycle and repair.

(Sasaki 2006: 125)

Some previous studies have examined the role of the concept of *mottainai* in Japanese culture concerning food waste. Based on the analysis of the daily life of Japanese consumers, Sirola et al., (2019: 8) make the observation that the concept of *mottainai* “seemed to guide the participants’ behavior in various everyday situations and facilitated precision in consuming ingredients fully” and “also guided the participants to buy only necessary food products, consume all the leftovers, and plan so that nothing goes to waste”. This is represented by the comment made by one of the subjects “[t]he expression and idea of *mottainai* is infiltrated to Japanese people and I, as well, keep that always in mind” (Sirola et al., 2019: 8).

Thus, *mottainai* has received a considerable amount of attention from the perspective of environmental protection and can act as one of the principles of behaviour in Japanese culture. The next section will show that *mottainai* can be regarded as a cultural keyword, a concept that plays an important role in Japanese culture.

2.2. *Mottainai* as a Japanese Cultural Keyword

The concept of a cultural keyword was popularized by Wierzbicka (1997), who claims that every language has a set of key terms that reflect the core values of its culture. An analysis of the concepts that have a significant role in culture provides valuable insights into the culture. Currently, terms such as *enryo*, *on* or *omoiyari* have been studied as cultural keywords in Japanese.

- (4) [A] key word such as *enryo* (roughly ‘interpersonal restraint’), *on* (roughly ‘debt of gratitude’) and *omoiyari* (roughly ‘benefactive empathy’) in Japanese can lead us to the center of a whole complex of cultural values and attitudes, expressed, inter alia, in common conversational routines and revealing a whole network of culture-specific “cultural scripts”. (Wierzbicka 1997: 17)

Wierzbicka (1997) lists a number of criteria for cultural keywords. For instance, “the word in question is a common word” and “very frequently used in one particular semantic domain” such as “the domain of emotions” or “moral judgments” (Wierzbicka 1997: 16). *Mottainai* can also be regarded as a keyword in Japanese culture, as it is often used in everyday life and can act as a guide for behaviour concerning food waste.

It is not easy to explain the meaning of such a culture-specific concept to those who are unfamiliar with the given culture. If you use the English word *waste* to describe the meaning of *mottainai* to a native speaker of English, the detailed differences in meaning between them will be overlooked. To overcome this problem, this study employs Natural Semantic Metalanguage (NSM) (Goddard and Wierzbicka 2014), an analytical framework that allows for the definition of culture-specific concepts in a way that can be understood by those who do not belong to that culture.

2.3. Natural Semantic Metalanguage (NSM)

Natural Semantic Metalanguage (NSM) is a metalanguage for describing the meaning of language. NSM assumes the existence of self-evident concepts named *semantic primes* and describes meaning by decomposing concepts into them. Based on an empirical investigation of over 30 languages, the following approximately 65 capitalised concepts are posed as semantic primes, which are presumed to be expressible in all languages.

Substantives:	I~ME, YOU, SOMEONE, SOMETHING~THING, PEOPLE, BODY
Relational substantives:	KIND, PARTS
Determiners:	THIS, THE SAME, OTHER~ELSE
Quantifiers:	ONE, TWO, SOME, ALL, MUCH~MANY, LITTLE~FEW
Evaluators:	GOOD, BAD
Descriptors:	BIG, SMALL
Mental predicates:	KNOW, THINK, WANT, DON'T WANT, FEEL, SEE, HEAR
Speech:	SAY, WORDS, TRUE
Actions, events, movement, contact:	DO, HAPPEN, MOVE, TOUCH
Location, existence, specification:	BE (SOMEWHERE), THERE IS, BE (SOMEONE)'S, BE (SOMEONE / SOMETHING)
Life and death:	LIVE, DIE
Time:	WHEN~TIME, NOW, BEFORE, AFTER, A LONG TIME, A SHORT TIME, FOR SOME TIME, MOMENT
Space:	WHERE~PLACE, HERE, ABOVE, BELOW, FAR, NEAR, SIDE, INSIDE
Logical concepts:	NOT, MAYBE, CAN, BECAUSE, IF

Intensifier, augmentor:	VERY, MORE
Similarity:	LIKE~WAY~AS

Table 1. Semantic primes (English exponents), grouped into related categories
(Goddard and Wierzbicka 2014: 12)

The semantic primes have restrictions on how they can be combined. The following are some combinations allowed in FEEL.

- (5) someone FEELS like this
 someone FEELS something (good / bad)
 someone FEELS something (good / bad) toward someone else

Finally, this study makes use of the concept of semantic templates, which has been recently introduced into the NSM. The NSM explications for words with a similar meaning have a common structural pattern. Semantic templates allow for words with similar semantic structures to be described in a way that reflects their similarity. Goddard (2018) presents the following four templates for English adjectives related to evaluation.¹

Groupings	Examples
A: “First-person thought-plus-feeling” words	<i>great, wonderful, terrific</i>
B1 & B2: “Experiential” evaluators	<i>exciting, entertaining, delightful</i>
C: “Lasting effect”	<i>powerful, memorable, inspiring</i>
D: Purely cognitive evaluators	<i>complex, excellent, brilliant</i>

Table 2. Groupings for English evaluational adjectives (positive words only)
(Based on Goddard 2018: 102)

Mottainai, an adjective that evaluates a certain event as in (1) or (2), is considered to belong to group A. Goddard mentions two types of linguistic evidence to identify which group a word belong to. The first is the possibility of co-occurrence with the verb *feel*. Adjectives from group A can follow the verb *feel*, as in *I feel great/ wonderful/ terrific*. On the other hand, adjectives from the other groups are basically impossible as in **I feel exciting/ complex*.² Secondly, they can be used as a self-contained word with an exclamation mark, as in *Great!/ Wonderful!/ Terrific!*.

The term *mottainai* passes the two linguistic tests above. Regarding the first, FEEL, one of the English primes, is equivalent to KANJIRU in the Japanese primes (Asano-Cavanagh and Farese 2015).

¹ B1 and B2 are treated as the same group as there is little difference in their templates.

² The linguistic evidence given by Goddard should be considered as a rough guide, as some adjectives from other groups can follow *feel*, as in *I feel powerful/ excellent*.

The adjective *mottainai* can be followed by the verb KANJIRU (FEEL) as in *mottainaku kanjiru*.³ Secondly, it can be used as a self-contained word with an exclamation mark, as in *Mottainai!* This study makes use of the following semantic template for group A to define the meaning of *mottainai*.

(6) Template A: “*first-person thought + feeling*”

a. I think about this X like this: [first-person thought]

b. “ ——
—— ” [thought content]

c. when I think like this, I feel something (very) good/ bad because of it [feeling]

(Based on Goddard 2018: 103)

The template (6) is composed of three components. The semantic component (6a) introduces what the speaker thinks about X. Component (6b) is the content of thought, and the group A adjectives differ mainly in this part. Finally, component (6c) describes the feeling that results from the thought.

Section 3 attempts to define the meaning of *mottainai*, which can be regarded as a Japanese cultural keyword, in a format based on the semantic template (6).

3. Semantic Analysis of *Mottainai*

This section discusses the meaning of *mottainai* based on its usage. 3.1 presents the NSM explication for *mottainai*, showing that it suggests that another very good event could have occurred if the event had not occurred. 3.2 points out that this is the key difference between *mottainai* and *waste*, which makes *mottainai* attractive as an environmental slogan and allows its extended usage not found in *waste*.

3.1. The Semantic Explication for *Mottainai*

First of all, let us consider the examples of the use of *mottainai* once again. The first two sentences (7) and (8) are the repeated examples of *mottainai* in (1) and (2).

(7) Mizu-wo sonnani nagashite-wa *mottainai*.⁴

water-ACC like that let run-TOP *mottainai*

‘It is *mottainai* to let the water run like that.’

(= (1))

³ It should be noted that English adjectives follow the verb *feel*, whereas Japanese adjectives precede *kanjiru*.

⁴ As seen in (1) and (2), the English-Japanese dictionaries offer an English translation for *mottainai* based on the use of *waste*. To focus attention on the semantic differences between *mottainai* and *waste*, *mottainai* remains untranslated in both the gloss and the translation provided in (7-9).

- (8) “Katta bakari-no aisukuriimu-wo jimen-ni otoshichatta.” “Aa, *mottainai*.”
 bought just-GEN ice cream-ACC ground on dropped oh *mottainai*
 “The ice cream I had just bought fell on the ground.” “Oh, *mottainai*.” (= (2))
- (9) Sonnani kami-o nanmai-mo tsukatte-wa *mottainai*.
 so many paper-ACC sheets use-TOP *mottainai*
 ‘It is *mottainai* to use so many sheets of paper.’
 (Kenkyusha’s New Japanese-English Dictionary)

What is common in (7-9) is that the speaker uses the term *mottainai* to describe each event (‘to run too much water’, ‘to drop the ice cream’ or ‘to use so many sheets of paper’). When these events happen, they perceive them as something bad. At the same time, it suggests that some very good things could have happened if such an event had not occurred (a lot of paper or water has many uses and eating ice cream makes many people happy). Thus, the occurrence of a bad event, which is described as *mottainai*, suggests that what has been lost is something of value. As a result of the loss of something valuable, the speaker has a bad feeling. This study proposes the following explication (10) for *mottainai* based on the semantic template (6).

- (10) *X is mottainai* (e.g. X = to run too much water, to use so many sheets of paper)
- a. I think like this when something like X happens:⁵
 - b. “something bad happened
 if something like this didn’t happen, something very good could happen”
 - c. when I think like this, I feel something bad⁶ because of it

The explication (10) is composed of three components. Component (a) introduces the thought at the time of the occurrence of an event like X. Component (b) indicates that the speaker thinks that ‘something bad happened’ and ‘if something like this didn’t happen, something very good could happen.’ Consequently, they feel something bad as suggested by component (c).

Regarding component (b), ‘something bad happened’ shows that the speaker sees the event described as *mottainai* as something bad, which implies the event like that should not occur. Next, the component ‘if something like this didn’t happen, something very good could happen’ predicts

⁵ The adjective *great*, which belongs to the same group A as *mottainai*, modifies things as in *a great movie*. *Mottainai*, on the other hand, basically modifies an event, so component (a) is proposed here as not ‘I think about this X like this’ in (6), but ‘I think like this when something like X happens’.

⁶ Goddard (2018: 103) argues that group A adjectives in English involve extreme feelings (not just ‘good’, but ‘very good’). It is worth noting that the Japanese term *mottainai* does not follow this tendency.

that the acceptability of *mottainai* decreases in contexts where it is difficult to perceive that the occurrence of a bad event prevents the occurrence of another worthwhile event. In (11), a modified example of (2), the component ‘something bad happened’ is satisfied in that the ice cream is dropped and becomes inedible. The acceptability of *mottainai* depends on whether it is possible for the speaker to think that ‘if something like this didn’t happen, something very good could happen.’

- (11) “{Katta bakari-no/ ? Nokori hitokuchi-no / ?? Hotondo tabeowatta} aisukurimu-wo
 {bought just-GEN/ remaining a bite-GEN / almost finished eating} ice cream-ACC
 jimen-ni otoshichatta.” “Aa, *mottainai*.”
 ground on dropped oh *mottainai*
 “{The ice cream I had just bought / ? A bite of ice cream/ ?? Almost finished ice cream}
 fell on the ground.” “Oh, *mottainai*.””

In (11), as the amount of ice cream dropped reduces, the acceptability of *mottainai* decreases. Firstly, the fact that the someone dropped the one that has just been bought implies that they could have eaten the whole thing. As it is easy for the speaker to think that ‘if something like this didn’t happen, something very good could happen’, the term *mottainai* can be felicitously used. Secondly, if the dropped object is a small bite of ice cream, it becomes less acceptable as it is more difficult to think in the same way. Lastly, if the item dropped is an ice cream that has almost been eaten, it becomes even less acceptable. As there is little to lose, it is highly unlikely to think that another very good event could have occurred.

Thus, *mottainai* suggests not only the occurrence of a bad event but also the possibility that a very good event could have occurred if that event had not occurred. The next section will argue that this is the key difference between *mottainai* and *waste*.

3.2. The Semantic Difference between *Mottainai* and the English word *Waste*

As discussed above, the Japanese word *mottainai* is basically translated into the English word *waste*. This section aims to clarify the differences in meaning between *mottainai* and *waste* through the observation of cases where *mottainai* cannot be translated into *waste* and the other way around. This study claims that the meaning represented by the component of the explication for *mottainai* ‘if something like this didn’t happen, something very good could happen’ proposed in 3.1 is the key difference between *mottainai* and *waste*, which often prevents the one from acting as a translation of the other.

Firstly, let us observe the cases where *waste* cannot be translated into *mottainai*. The term *waste* describes the time consumed meaninglessly to talk with someone in (12) or convince

someone in (13). The English-Japanese dictionaries provide a Japanese translation using the Japanese word *mudada* (roughly, ‘wasteful’) as the equivalent of *waste*.

(12) Your talking with him is a complete waste of time.

‘Kare to sodan suru no wa mattaku jikan {-no mudada/ ? -ga mottainai} yo.’

(O-LEX English-Japanese Dictionary)

(13) Trying to convince him that you are right is a waste of time. He is sure that you are wrong.

‘Anata ga tadashii to kare ni settoku suru koto wa jikan {-no mudada/ ? -ga mottainai}.

Kare wa anata ga machigatte iru to kakushin shite imasu.’

(Genius English-Japanese Dictionary)

In (12) and (13), it would be unnatural to translate *waste* as *mottainai*. The reason why *mudada* works as a better translation than *mottainai* in (12) and (13) is due to the semantic component of *mottainai* ‘if something like this didn’t happen, something very good could happen’. The speaker in (12) and (13) is certain that the event, which is described as *waste*, is meaningless as represented by the word ‘complete’ in (12) or the subsequent sentence ‘He is sure that you are wrong’ in (13). The emphasis is on the futility of the time spent on conversation or persuasion, not on the other things that could have been done with the time lost. These contexts do not encourage the speaker to think that ‘if something like this didn’t happen, something very good could happen’.

If the succeeding sentence sheds light on other, better possibilities as in (12)’ or (13)’, the acceptability of *mottainai* increases as follows.

(12)’ Your talking with him is a complete waste of time. You should talk to someone more trustworthy.

‘Kare to sodan suru no wa mattaku jikan {-no mudada/ -ga mottainai} yo. Motto shinraidekiru hito ni soudan subekida.’

(13)’ Trying to convince him that you are right is a waste of time. You should spend your time in a more meaningful way.

‘Anata ga tadashii to kare ni settoku suru koto wa jikan {-no mudada/ -ga mottainai}. Motto yuigi ni jikan o tsukaubekida.’

Changing the following sentence to ‘You should talk to someone more trustworthy’ in (12)’ or ‘you should spend your time in a more meaningful way’ in (13)’ shifts the focus on the other things that could have been done with the time lost. It becomes easier to think ‘if something like this didn’t happen, something very good could happen’ and the acceptability of *mottainai* increases.

Next, let us look at cases where the use of English *waste* as a translation for Japanese *mottainai* sounds unnatural. *Mottainai* can be used to describe not only certain events but also people or things. It describes the addressee's wife in (14) and the compliment the speaker received in (15), in the form *X niwa mottainai* 'mottainai to X'. In this case, *too good* or *more than I deserve* is used instead of *waste* to convey a meaning close to that of the original sentence.

(14) Kimi niwa *mottainai* okusan-desune.

you to *mottainai* wife-COP

'Your wife is too good for you.'⁷

(O-LEX Japanese-English Dictionary)

(15) Watashi no youna mono niwa *mottainai* ohome-no kotoba-desu.

1SG like person to *mottainai* praise-GEN word-COP

'Your praise is more than I deserve.'

(Shogakukan PROGRESSIVE Japanese-English Dictionary)

The speaker in (14) evaluates that the addressee's wife is too good for the addressee, implying that it would be better for her to get married with someone else. In (15), the speaker thinks that someone else should receive the addressee's compliment. Such usage of *mottainai*, which describes people or things, needs another NSM explication as it cannot be covered by the explication that involves the occurrence of an event as represented by component (6a) 'something bad happened'.

Still, this extended usage of *mottainai* seems to share the component 'if something like this didn't happen, something very good could happen'. The use of *mottainai* in (14) or (15) highlights not so much the pointlessness of the addressee's wife's getting married with the addressee or the addressee's praising the speaker. It lays emphasis on the possibility that another better event could have occurred. The speaker in (14) thinks that if she had got married with someone else, she might have had a happier life. In (15), it might have been better if someone else had been praised. To highlight another better possibility like these, *too good* or *more than I deserve* is used as a translation for *mottainai* instead of *waste*.

Thus, the component 'if something like this didn't happen, something very good could happen' can motivate the extended uses of *mottainai* such as (14) or (15). It is also related to the fact that *mottainai* has attracted attention as an environmental slogan, as seen in Section 2. Indeed, as with *mottainai*, the term *waste* can be used to warn against behaviour that is not good for the environment, such as excessive use of water like (1). However, the use of *mottainai* also implies that there are

⁷ In fact, *waste* can also be used in a translation of *mottainai* in (14) as in "Your wife is wasted on you". This expression, however, focuses on what is lost by marrying the current partner, rather than on other better possibilities. It is therefore likely that the Japanese-English dictionary preferred to use the expression *too good* as a translation.

more effective ways to use something. In other words, *mottainai* not only discourages people from using something in a non-eco-friendly way, but also suggests that it is a valuable thing that could be used in a better way. In recognising the value of something, *mottainai* can work better to encourage people to appreciate things and be careful not to harm the environment. For this reason, *mottainai* is more suitable for a global slogan to guide our actions on environmental protection.

The key difference between *mottainai* and *waste* is represented by the component ‘if something like this didn’t happen, something very good could happen’. It can motivate an extended usage of *mottainai* not found in *waste*, and its adoption as an international environmental slogan.

4. Concluding Remarks

This study analyses the meaning of *mottainai*, which has attracted attention as a global slogan for environmental protection, from the perspective of cultural keywords in Japanese. Using NSM as an analytical framework to define the meaning based on the concepts that are assumed to exist in all languages, this study attempted to clarify its meaning in a way that is accessible to cultural outsiders. It was also pointed out that the meaning of *mottainai* represented by the component ‘if something like this didn’t happen, something very good could happen’ is the key difference in meaning from the English word *waste*, and that this can motivate an extended use of *mottainai* and its adoption as a slogan for environmental protection. The NSM explication for the English word *waste* and its further differences from the term *mottainai*, which could not be dealt with in this study for reasons of space, will be the subject of future work.

References

- Asano-Cavanagh, Yuko and Gian Marco Farese. (2015). Japanese semantic primes, with English equivalents. Available at: <https://intranet.secure.griffith.edu.au/schools-departments/natural-semantic-metalanguage/downloads> [Accessed 5 January, 2022].
- Goddard, Cliff. (2018). *Ten lectures on Natural Semantic Metalanguage*. Leiden: Brill.
- Goddard, Cliff and Anna Wierzbicka. (2014). *Words and meanings: Lexical semantics across domains, languages, and cultures*. Oxford: Oxford University Press.
- Sasaki, Mizue. (2006). Perspectives of language: cultural differences and universality in Japanese. In Wauchope, Samantha (Ed.) *Cultural diversity and transversal values: East-west dialogue on spiritual and secular dynamics*, 119-126, Paris: UNESCO.
- Sirola, N., Sutinen, U. M., Närvänen, E., Mesiranta, N., and Mattila, M. (2019). Mottainai! A practice theoretical analysis of Japanese consumers’ food waste reduction. *Sustainability* 11(23): 6645.
- Wierzbicka, Anna. (1997). *Understanding cultures through their key words: English, Russian, Polish, German, and Japanese*. Oxford: Oxford University Press.

執筆者紹介（掲載順）

- 小葉 哲哉 (こぐすり てつや)
大阪大学大学院言語文化研究科（言語文化専攻） 准教授
- 瀬戸 義隆 (せと よしたか)
立命館大学言語教育センター外国語嘱託講師
大阪大学大学院言語文化研究科（言語文化専攻） 博士後期課程
- 蘇 暁笛 (そ ぎょうてき)
大阪大学大学院言語文化研究科（言語文化専攻） 博士後期課程
- 田尾 俊輔 (たお しゅんすけ)
大阪大学大学院言語文化研究科（言語文化専攻） 博士後期課程
- Hiromasa ITAGAKI (いたがき ひろまさ)
常磐大学総合政策学部 助教
- Takashi MINO (みの たかし)
長崎純心大学人文学部 講師
- Hiromichi SAKABA (さかば ひろみち)
大阪大学大学院言語文化研究科（言語文化専攻） 博士後期課程

言語文化共同研究プロジェクト 2021

認知・機能言語学研究 VII

2022年 3月31日 発行

編集発行者 大阪大学大学院言語文化研究科